

トウベラマ考——歌いつぐ干立村の心

与那国茂一（よなぐに・もちち）著

はじめに

私は、西表島西部の浦内川のほとりにあつた浦内村で、大正八（一九一九）年に生まれた。その村がしだいに人口が減り、ついに廃村になって以来、私は干立、祖納と移動して、祖納より軍隊に入隊して除隊後は干立村に本拠地を求めて生活している。

私が子供のころ、ある老人から「シマ倒し者」つまり、村を滅ぼした人間と言われ、はなはだしい場合は、「ユリフサ」つまり波に乗って流れ寄ってくる海草に例えて軽蔑されたことがある。しかし、思い起していただきたい。明治二六年に八重山を訪れた弘前の探検家の笹森儀助は、「人頭税」とマラリアに苦しむ西表島の人々を見て、八重山全体で遠からず一八か村が廃村となるだろうと予言した（『南嶋探験』）。その予言は、浦内村を含めてみごとなまでに的中し、一七か村までが廃村の憂き目を見たのであった。ただ一つの例外となった村、それこそが現在私の住む干立村なのである。

干立村が廃村にならなかったのは、さまざまな要因があつたことと思う。しかし、もっとも大きな原因は、周りの村々からの移民を受け入れたという事実にあることは間違いないと思う。つまり、干立村は、まさに「シマ倒し者」たちが、節祭で歌われる「インヌ サグサヤ ウラウラドゥ ユル」つまり、海のささ草が浦々に寄りそってくるのを受け入れることで生き延びることができたのである。

干立に定住するようになって三〇年。私は節祭の「シチ歌」がプリントされて渡されるものを、毎年手にしているが、毎行事ごとに歌の語句や字の誤りや間違いが目につき気になるようになった。

公民館の幹部が前年のものを元に写してプリントするが、年若いせいで方言が良く判らないため過ちも起こるのだらうと、これまでは善意に解してきた。人間はえてして聞き違い、言い違い、さらには解釈違いも多い。しかも、一度思い込んだら「先輩からかく教わった」とかたくなにこれを墨守し自己の間違いや過ちを認めようとしない意固地さがあるのはどうであろうか。これでは年ごとに少しずつ違った字句が出てきてそれが重なっては将来大きな間違いのものになるやも知れぬと思い、後世のため私が聞いてきたものを採録することにした。

私はもとより浅学非才で、学歴も高等小学校二年を出たに過ぎない。その任に非ずと卑下していた。しかし、今回、勇気をふりしぼって、民俗芸能の保存上ゆるされない誤りを質すために、あえて提言してみたいのである。驚馬に鞭打った小篇であるが、大方のご批判を期待している。

干立の歴史は主として大浜正演・黒島英輝両氏に聞き書きした。ずいぶん聞き落とし、聞き違いがあるのであるが今となつては致し方ない。今ではお二人ともこの世を去って亡く、ご冥福を祈るのみであることが残念でならない。

第一部 トウベラマ考——干立につたわる歌をめぐって

トウベラマ(干立村)

一、フシタティヌ トウベラマ	干立村の夫婦石よ
スーリ タキバルヌ ミウトウイシ	嵩原に居た頃より夫婦石と唱われた夫婦石

よ

ヒーヨイ スーリ ユーバナウレ	睦まじくあれ(以下繰り返し)
二、ミウギシイナ トウベラマ	しっかり根着いて下さいよ
スーリ タユギシイナ ミウトウイシ	動揺してはいけません腰を据えて下さい
三、シマトウトウミ トウベラマ	干立村のある限り
スーリ フントウトウミ ミウトウイシ	島のある限り未来永劫だよ村人もそのよう

にありたい

トウベラマ(浦内村)

一、ウラチムラ トウベラマ	浦内村の夫婦石
ハーリ トウユミムラ ミウトウイシ	果報の村福德の村の夫婦石(以下繰
り返し)	
二、ミウギシイナ トウベラマ	身動きしてはいけない夫婦石よ
ハーリ ドウギシナ ミウトウイシ	動揺してもいけません
三、シマトウトウミ トウベラマ	浦内村と共に島のあるかぎり
ハーリ フントウトウミ ミウトウイシ	国のあるかぎり未来永劫だよ夫婦石

よ

トウベラマの解説

このトウベラマの歌は、干立村、浦内村唯一の民謡であるといつてよい。別に沖縄本島の「口説」を真似て、干立、浦内のクトウキ(口説)があるが、これは、役人が自己の名声を上げるため作詞し唱わせたものと考えられ、そのほかにも、役人が作詞した干立村のありさまの他には調すべきものはない。干立のトウベラマは門外不出と言ってお正月の祝日にのみ干立御嶽のトゥリムトゥ家である宇保家で唄われたもので、宴席や多数集会の場所では唄う事を禁ぜられていた。それで、一部平民実力者のみ秘匿伝承されて来ている。階級制がなくなりシチ(節祭)が村の祭事として執り行われるようになって、一般の人々もこの歌の存在を知り唄うようになった。戦後の一時期迄秘密のベールに包まれていて伝承者以外窺い知ることができなかったのである。

浦内村にも大小のアトゥクを歌って表記のトウベラマがある。干立のものに大層似ていて同一だと言っても差し支えない。浦内村建ても多柄村と同代と考えられ、ナメラ台地の多柄村がタカラの兼久地(砂の堆積地)とナンダデイの高台に移動した際、一部が浦内村に移ったとの古老の話によれば、同時代に違いないと考えられるのである。

当時、カトゥラ潟原は漫湖であったようで、カシピダの崖は大小のアトゥクの島と地続きで、北側から伸びる砂地のイブの端はパナヌリの岸に連なっていたという。一七七一年

のいわゆる明和の大津波で浦田川（現在の浦内川）の河口が現在のように開き、砂土が流壊して、アトゥクの両島が孤立してからトゥベラマと呼称されたと思われる。浦田川支流のタカラ兼久地及びナンダディ台地（多柄、干立と分離）は明和の津波にあり兼久地カニク（砂の堆積地）になり、ナーニ、イミシクを経て更に現在地に住み付くのは一七八、九年頃で与那覇在番が津波後の先島復興に尽くした時代と考えられる。トゥベラマを作詞歌唱された年代は伝承もなく不明であるが、右の状況から推測すれば干立、浦内両村とも同時代に唄われ始めたと考えられる。

トゥベラマ考——歌詞の考察

フシタティヌ トウベラマ、スリ タキバルヌ ミウトウイシ、ヒョイ スーリ ユバナウレ

この「フシタティヌ トウベラマ」を、フシタティヌ トウベラハマと唄う人がいる。トゥベラマを「ハ」を入れてトゥベラハマと唄うのは疑問である。「カギヤデ風節」の「キユヌフクラシャ」の様に「フクラア」と唄えば「ラア」と、「ア」の語音が残る。残った「ア」の語音をそのままに「シャ」と唄うように、「トゥベラア」と唄えば「ラア」の「ア」の音が残るから、「マ」と接続して唄えば「ハマ」とハの語音を挿入する必要もなく、「トゥベラマ」と素直に唄い継ぐ事ができる。「キユヌフクラシャ」はそうのように唄っている。「ハ」音を挿入すれば今唄っているよう「トゥベラマ」と「トゥベラハマ」と二つの名詞になり、「トゥベラマ」が「トゥベラハマ」と改称される事になる。或いは「トゥベラマ」と「トゥベラハマ」と二つの呼称が昔から在ったのか？との疑問が残る。昔から「トゥベラ」と言い「マ」の愛称がついて「トゥベラマ」となって呼称されたに違いない。唄いにくいから、或いは語韻の関係で「ハ」を入れ「ハマ」として唄うというのは理由にならない。「トゥベラマ」と「トゥベラハマ」と二つの呼称が昔からあったとの伝承もない。普通、トゥベラーといっているのは、その証である。

「トゥベラマ」を「トゥベラハマ」と改称し唄うとすればこれは由々しき問題であり、後世に誤った呼称を伝えるという取り返しのつかぬ大きなミスをわれわれが犯すことにもなりかねず、後世の者に対し申し開きが出来ない。

もう一つ見逃してならないのは「トゥベラマ」を、「トゥバイラマ」と「バイ」を殊更入れて歌っていることである。これは語を強くするためと思われるが、先に述べた「ハマ」のように早急に訂正し本来の姿に戻すべきである。間違いを改めるに憚ることはない。間違ったまま後世に伝えることの方が重大な責任になる。

名前の由来については、トゥベラマは名称で別に意味はないと思う。海中に独立してポツンと立っているものに対しての名称と思われる。

丸間盆山節

まず、現在祖納、干立で歌われているマルマボンサン節を掲げておく。

一、ヨホー	マルマボンサン	ヨホー	丸間盆山という島を
ユニャユニャ	ミリバ	日暮れごとに見れば	
カジヌニユシリ		風の吹いてくる方向を知って	
ビリルアタグヤ		翼を休めているサギ達の賢さよ	

エンヤラヤンザ サ エイエイヤ (以下三行囃子のくりかえし)
 ハリバサーヌシ
 ヒヤマツタン タムヌジュー

二、ヨホー アダテイ ウフダデイ ヨホー 阿立村、大立村
 ウカリニ ソンバレ ウカリ村に ソンバレ村
 マヤマ ウティンチ 真山村、落道村
 ナリヤ フナウキ 成屋村、舟浮村
 (囃子) みごとな村々よ

三、ヨホー スナイ チクヂヌ 祖納津口の
 ミチンギヌ ウイニ 標木の上に
 イユ マスンディ 魚をうかがって
 ビリル アタグヤ とまっている海鶴よ
 (囃子)

四、ヨホー パナリミジュ クグ 外離島へ渡る海を漕ぐ
 フニブニ ミリバ 舟々を見れば
 クイユ ナラビテイ 声を揃えて
 リユウヌ カキグイ みごとな櫓の掛け声よ
 (囃子)

丸間盆山節の囃子の意味を考える

民謡「丸間盆山節」は祖納村の民謡である。この歌の囃子の最後の部分は普通、「ヒヤマツタヌ タムヌジュ」と唄われて来ている。しかし、この部分の囃子の言葉について、左記に記す通り現在歌われているとは違う伝承が祖納村にあった。このことが忘れられているようなのでとくに記しておくことにした。

私は、三、四〇年程前西表島を引き払い石垣島へ移住したが、昭和三四、五年頃のこと、正月の年始に石垣在の故石垣孫治さんを訪問した。その折り、私も自己流で三味線を少々かじっていたので二人して島歌を教わりながらお正月を過ごした事がある。氏は在西表の頃石垣長一さん、新盛行雄さん等と並んで三味線の大家と言われ、先輩に石垣孫安、西表用宗、崎山用能、波照間用幸の各氏、後輩に野底広一さん、宮良全作さん等がおられて民謡がたいへん盛んに唄われたものであった。その日は崎山節、殿様節、祖納岳節等を教示されながら楽しいお正月であった。たまたま「丸間盆山節」を習ったおり、氏が途中で三味線を止め私の囃子を唄い終わるのを待ち次のよう教示して下さった。「自分が若く三味線を自己流で習い始めの頃、イルンテ家の山田用福爺さんから、囃子の間違いを指摘された」という。

今唄っている「ヒヤマツタヌタムヌジュ」は誤りで、間違って唄っており、「ヒヤマツタヌタムツサ」が本当の囃子でそのよう唄うのが正しい、と教えられた。「先輩たち三味線を嗜む者に忠告し以後間違えて唄わぬようにしてくれ。と山田の爺さんに懇々説諭された

との事である。「ヒヤマツタン」は掛け声で「やつこらさ」に当たり「タヌムツサ」は頼もしい、頼むぞの意で、西表の方言である。「タムヌジュ」という方言は西表にないと教示された。以後心に深く刻み込み忘れてはいない。

西表に住んでいた時は先輩各氏が多く居て年若い私の言葉は到底聞き入れてもらえなかった。今頃になってこの事を持ち出せば西表在住の人々は多分相当多くの人達が反発し異議を唱えるだろう。しかし、これは私の考え解釈でもない、山田の爺さんの言葉である。また、山田の爺さんは「往昔はユカリピトウ（のちの土族）だけが三味線を手にすることができた。ブザ（のちの平民）は怠慢に流れ農仕事を疎にし、貢納に差し支える恐れがあるというので、誰彼となく三味線を手にすることは許されなかった。今は、嗜みとして民謡を三味線に乗せ唄う者が多くなり、島の歌が皆唄える結構な世の中になった。まことに嬉しいことである。しかし、歌の文言その言わんとするところの意を充分吟味して唄い後輩たちに伝え正しく唄うようにしてくれ」と言われた。

歌詞にこめられた心を私なりに解説しておきたい。一句目は、仲良田原や外離島の耕作地に往来するごとに見返る「盆山」には、日暮れになると風向きを知って、北風には南側、南風には北側と風を避けて翼を休めているサギやウミウの賢さにはまことに感嘆するほかない、と唄い上げている。二句目は、縁故や知人、友人の居る各村々には、ご機嫌伺いや疎遠を謝すなどかたときもおろそかにしてはいけなさと教え、また村が違うからといってばかにしたり差別したりしてはいけないという、島で暮す智慧を唄ったものと思う。三句目は、一句目とやや似ていて祖納の港口に出入りする舟への目印のみちしるべの木の上にとまって魚を狙うウミウの姿は見事というほかはないと唄っている。四句目は、外離島の耕作地への往来の三反帆船が、競って漕いでくるその姿と勇壮な「エイサ」「エイサ」の掛け声の競い合いを描いている。

最後に一言付け加えておくと、四句目は私が教わったところでは、「リュウヌカキグイ（櫓の掛け声）」と唄うのが正しく「リュヌウタウトウ」と唄う人があるのは間違いである、という。外離島に耕作に往く舟は三反帆の舟で二、三隻で競漕して仕事に往ったもので、お互い競い合い「エイサ」「エイサ」と掛け声をあげたものでその様を唄ったものであるという。

先師先達の忠告を忘れぬため、非才を顧みずここに記した後輩の反省をお願いしたい。歌は唄う人が主とか言って間違え取り違えて唄っても、その間違いを指摘し正してくれる先輩もいなかった。よほどの親しさが無い限り放任しておくのが普通であった。これでは一人よがりになりお山の大将になり兼ねない。島の民謡を正しく後世に伝えて行くためには先人の言を良く聞きその意を解し自己を反省し歌の意、言わんとする意図、各章との継りを把握解釈しなければならぬ。伝承は「言い違い、聞き違い」その意図の把握解釈違いがあるのは、人間である限り避ける事のできぬ落とし穴である。

先人の文言口伝が正しく現代人の意識解釈は間違い誤りとも言いきれぬ。ここで正しい方言が重要な意味役割を持つ。正しい方言を知らぬため歌の意図が汲み取れぬ場合が多い。方言を知って文言を読み下していけばその言わんとする意図が解る筈である。

鳩間節の囃子の意味は

鳩間節は、鳩間島では次のように唄われている。唄い出しの部分だけを示す。

一、パトゥマ ナカムリ パリヌブリ
 クバヌ シチャニ パリヌブリ
 ハイユヨー テイバ
 カイダギ テイトウルトゥ デインヨ
 マサテイ ミグトゥ
 鳩間島の仲森に走り登って
 クバの木の下に走り登って
 (以下三行は囃子。くりかえす)

この囃子の部分を、郡下の各村々の人々は「カイダキ チトゥルトウ デインヨ」と唄っている。そして、その意味は「掻い抱き乳取ると」だと教える人もいる。しかし、この囃子は間違いである。今は亡き慶田城勇さん(上原村出身で長く鳩間島に在住された)に教えられたことがある。それによると、「カイダキ テイトウルトゥ デインヨ」と唄うのが正しい。「カイダキ」は「これだけ」「これほど」と言う意味で、「ティトゥルトウ」とは手に取るようにとの意味である。鳩間島よりパイバダ(南方)西表島の山々が手に取るようくつきりと眺められると言う意味である。鳩間島の人々は皆このように唄い解釈している。「他の村の人々が『カイダキ チトゥルトウ』と唄っているのを見聞きするとこっけいを通り越して苦々しい」「鳩間の人々はそんな唄い方をせぬだろう。島生まれの人に聞いてみる事だ」と教示された。

三味線が上手で鳩間島の唄に造詣の深い浦崎英七さんに聞いた処、その通りであると言っておられた。現八重山民謡の大家と言われる方達の中にも「掻い抱き乳取ると」唄っておられる方もいるので嘆かわしい次第である。と、島の言葉はその土地、島で生まれ育った人々が正しく話す。他村の人々がいくら上手に真似話しても、発音やアクセントに違いがあり、そうたやすく真似して言えるものではない。その言葉、唄の文言、その意味についてはなおさらである。と教示されたのでここに記しておく。

デインサ節

- 一、バンヤ ムニシカサ
 トウシユタル ナラバ
 ヤラビトゥジ サリキ
 キチガイナリユ
 デインサー
- 二、ピトゥヌ トウジミウトウ
 ミウトウニドゥ カイシャル
 トウシユリヤトウ ヤラビヤ
 ウチランムヌ
- 三、アサニスル ミドウム
 アサトゥリスル ミドウム
 ウリカラドゥ
 ブトゥユ ユダンシミル
- 四、ヤーマーリスル ミドウム
 ナガビリスル ミドウム
 キンヤネヌ ミドウム

年寄りの繰り言を聞かそう。
 年寄りになつて
 若い女子を妻女にする
 まことにもつて気違い沙汰だ
 ということであるよ(囃子)
 夫婦というものは、
 似た者夫婦がよい
 年寄りと若い者とは
 まったくもつて似あうものではない
 朝寝する女
 芋の朝掘りをする女は、
 朝食が遅くなつて
 夫まで油断させてしまう
 家庭に居つかず、
 おしゃべりをしに出歩く女は
 家事や機織りが疎になつてついに

- キバミテイ カイキル
 ウッスンダリ ミドウン
 マイガンキル ミドウン
 ミンダキリ ミドウン
 ビトウユ フラスル
 ウヤヌ クイシクスドゥ
 ウシュヌ ミングイ
 ユヌムヌデイ シカンスヤ
 トウガンバチン カブル
 ムニイザバ チチシミ
 フチヌフカ ンダスナヨー
 ユヌヌシキカラヤ
 マタン イリヤナラヌ
 シマ ムチドゥ ヤームチ
 フニヌリトゥ ユヌムヌデー
 シトウフナク ウヤファ
 スラニバ ナラヌ
 ムヌユミン サール ミドウム
 バナンギ ブリサル ミドウン
 ブド ムトウミ
 タチュシナラン ムヌ
 ウヤユネーン ヤラビ
 ファユネーン トウシユリヤ
 チンダラサ カヌサシ
 ウマニバナラヌ
 一一、 トウジュネーヌ バガ ヒギドウン
 チカク ユーラン ムヌディンド
 チカク ユリテイカラヤ
 シキンヌ ウタガイ
 一二、 ブトウユ ネーン バガミドウン
 チカク ユーラン ムヌディンド
 チカク ユーリカラヤ
 ユヌヌ ウタガイ
 一三、 パラタカサ フニヌ
 シマトウラバ ミラデイ
 キムタカサ ミドウム
 ヤムタバ ミラデイ
 パラタカサ フニヤ
 ウミヌ ウイニドゥ クルブ
 キムタカサ ミドウム
 一四、
- 着る物まで買つて着るようになる
 項に髪を垂らす女、
 前髪を切り
 耳もとに結い上げる女は
 人をほうけ者にする
 親のおっしゃる言葉は、
 国王様の仰せと同様
 それを聞かぬ者は
 科、罰を受ける
 言葉はよく慎み
 口の外に出すな。
 一度口にしたことは
 二度と口に入らぬ
 村を治めることは
 家庭を治めることと同じ、
 船乗りと同様に船頭と舟子のように、
 親子は揃わねばならぬ
 冗言の多い女、
 口の軽い女は、
 夫と睦みあうことが
 できない
 親のない童子、
 子供のない年寄り、
 気の毒だ可愛そうだと
 慈しみ思わねばならぬ
 (寡婦は) 妻のない若い男に
 近しくするものではないよ
 近しくすれば
 世間の人が疑うよ
 夫のない若い女は
 (寡夫に) 近しくしないものだよ
 近しくすれば
 あらぬ疑いがかかるよ
 帆柱の高い舟は
 島に到着しない
 気位の高い女は
 家庭円満をはかれない
 帆柱の高い舟は
 海の上で転覆する
 気位の高い女は

バイニドゥ クルブ

一五、インヤ ヤヌバン シクブン

トウリヤ シマウティ シクブン

ピトゥヌ イタジラ ミドゥン

シキンヌ イーシテイ

一六、クルマヤ ミブシヌ フサビシドゥ

シンリヌミチン ハイミグル

ピトゥヤ ミブシヌ シタシドゥ

フドゥユ ファイシテイ

一七、デインサブシバ チクリ

ヤラビンキャニ ユマシ

シキンヌ イマシミ ナスドゥ

バンヤ ニガウル

一八、ウイバルヌ シマヤ

ヤマジマドゥ ヤシガ

シミナリティカラヤ

ハナヌ ミヤク

家庭の離散を招く

犬は家の番が職分、

鶏は刻時告げが職分、

あの男この男とついたり離れたりする

尻軽女は世間のもの笑いの種

車は三寸の楔で

千里の道を往復する、

人は三寸の舌で

身を亡し家庭の破滅を招く

デインサ節を作詞して

若者達に唄わせ

世間の戒めとなすことが

我が願いである

上原という村は、

いなかの村であるけれど

住み慣れてみれば

花の都と同様だ

デインサ節の解説

これは、干立村の小底ブナリさんの伝承によるデインサ節である。デインサ節は十八番までであるが、後世の人の作によるものが二、三ある。「人や親ままでの句」、一般に歌われている「親子美しや子から」がある。脱落したものに「冗言さる女」など、各句の間の一部分に口当たりの良いものにすり替えられたものがあり、各句を良く吟味すれば未だ有ると思われるが、煩わしいのでここでは、後世の作を除いた。諸賢のご判定を仰ぎたい。

ただし、一番大事なことは婚前の女子には「ミドゥン」婚後の女子には「ミドゥム」と、使い分けて唄う事である。これを特に強調しておく。

愛郷歌「干立村」

一、クバやベンドゥにしづまれる

ビロウやヤエヤマヤシに鎮まれる

もとのウガンはゆうじゃくしたいき

元の御嶽は有若氏泰基

むらだてはじめてまもりがみ

村建て始めて守り神

スーリ フタデイむらトウユミむら

干立村よ名高い村よ（囃子）

二、ウイヌカーはインヌムラ

上の塞井戸は西の村

アダヌカーはアンヌムラ

アダヌ塞井戸は東の村

みすぎよすぎのたからみず

身すぎ世すぎの宝水

三、うみにどっかり海にトウベラーマ

どっかりトウベラーマの岩よ

アタグシルサヤやどりいて

海鵜と白サギが宿り居て

フタデとともにゆるぎなし

干立と共に揺るぎなし

四、ユダムチカイシャごほんまつ

枝持ち美しや五本松

ゆうひをあびてあでやかに

アダネの丘にそそり立つ

五、ミキヤキガゾのいろそえて

みどりしたたるカナザヤン

マヤダンないてわをつくる

六、タクヤグシクミ、ウブヌイユ

ムチイユ、グルクンすなどりに

そのなもたかしタカラピー

七、ナーニー、タカラのむらあとに

なかだて、はるだてのジーセンの

てがたのこしてジイリヤガマ

八、ミズンよりくるタイフチを

まわってナメラのはまうえは

九、きゆうようにのりしタカラのむらのあと「球陽」に載りし多柄の村の跡

ながれゆるやかヨナダのかわの

いしばしわたればヤンダルにおい

ゴツカルないてはるうらら

一〇、かみをすいたカビヤあと

じょうふバサヌヌ、グイフを

ほしたてさらしたマヤパタラ

一一、めいわのつなみユリキマシ

へそまでつかるマラントウに

チの地 フクリピヤカカしたアマダウチ

真竹をねじって腰紐に

みよしにくろがねウニファアが

おしわけはらいてなはのみなといり

一三、せぎたんほりだしたチクラヤン

ひごとよごとやすみなく

ざりがにつくるすなだんど

一四、ナイナトウはさんでプシキヤン

ガサン ガラブタ タチオーニー

キゾもみちひにしおをふく

一五、ながれながされかどとれた

てつよりかたいガルンイシ

カラカラコロコロいしのすず

夕日を浴びてあでやかに

アダネの地の丘にそそり立つ

セイシカとツツジの色添えて

緑したたる金座山

カンムリワシ啼いて輪をつくる

蛸やコウイカ、大魚

もちの魚やかさご魚の漁りに

その名も高し多柄干瀬

ナーニー村、多柄村の村跡に

仲立春立の地船の

手形を残してジイリヤの洞窟

いわしの寄り来るタイフチの地を

廻ってナメラの地の浜上は

流れゆるやか与那田の川の

石橋渡ればツルアダンが匂い

アカシヨウビンが啼いて春うらら

紙を漉いた紙屋跡

上布、芭蕉布、御用布を

乾し立て晒したマヤパタラ（筆の先）の地

明和の津波のなごりの寄り木柵の田

へそまでつかるマラントウの田

カワハギを乾燥させた棚が流されたアマダウ

愛郷歌「干立村」の解説

これは、昭和三七年七月に私が作詞したものである。第四句に歌ったみごとな干立の五本松は、松くい虫に食い荒らされて今はない。第一三句のざり蟹は、和名オキナワアナジ

ヤコ。第一四句のガラブタは、鰐のような顔をした魚。タチオーニは泥の中に垂直に入って行く細長い魚。キゾの和名は、シレナシジミ。第一五句のガルン石は、川底にあった塊が流水に転ばされてできた堅くて丸い石。

第二部 干立村の年中行事と古謡

干立村の年中行事とそれにかかわる古謡を収録する。方言のみによる歌詞とその直訳に解説を加えるという構成ですすめていると思う。なお、敬老の日など、全国で行なわれているものは省いた。

干立村の年行事(旧暦)

日取り 方言(漢字表記)

行事の内容

一月 四日

火の神の天からの降下

ジュールクニチ(十六日祭)

祖先供養の墓参り

二月 ニンガチタカビ(二月崇べ)

悪疫防除祈願

フサパヌニンガイ(草葉の願い)

害虫防除祈願

タニトウリ(種子取祭)

稲の播種の祈願

三月 サノチ(三月三日)

浜降り、女の節句

ピンガン(彼岸)

彼岸祭

四月 シーミー(清明)

清明祭、一門の祖霊祭

ユニンガイ(世願祭)

旧三月の豊年祈願祭

五月 シコマ(初穂祝)

稲の初穂奉納

(火の神祭)

天候願い

六月 プリヨイ(豊年祭)

豊年感謝の祭

カドゥカドゥヌニガイ

子寅午申の四方に願う

七月 ソール(お盆)

斗搔祝

八八歳の祝などの長寿の祝

シュビニガイ(首尾願)

十五夜にミリクとオホホの面を飾り、ねぎら

う

一年間の古事災厄の報告のため獅子昇天

九月 九日 芋、菊の節句

シマフサラ(悪疫払い)

山羊の血を染めた注連縄を村の入口に張る

シチ(節祭)

獅子、ミリク、オホホ干立村に降臨

一〇月 ジュンゴチタカビ(十月崇べ)

十一月 トウンジ(冬至)

パチソンガチ(初正月)

フキヌマチリ(ふいご祭)

鍛冶屋の祭、現在廃止

一二月 一四日 火の神祭

火の神の昇天

種子取祭

タナドゥリクトウキ

種子取口説

一、トウシニ イチドゥヌ タナドゥリエ

年に一度の種取祝には

ワリガワリモトウ イサミイデイ

我も吾もと勇躍して

タニヌシナジナ トウリカタミ
二、アフニヌキトウリ イサミクリ

粳と糯の種子の品々を取り担ぎ
荷担い棒に抜き取って勇んで
敬し囃す御神様へ

ウカマ カンタナ ソーチバシ
三、ナシルダニ イヒ マキテイ

窯の火の神、仏壇の祖先もお清めして
苗代田に行って種子蒔きをして

ティンシウチマリ ウカンカイ
ウテイル テイジャ ヤフアラカニ
四、イバイ ユシキュ トウリユシテイ

天神地祇のお神様へお願いかけて
蒔く種子粒も丁寧な

クルキン ヌキトウリ イキタテイテイ
いて

力芝とすすきを取り寄せ
勢いの良いものを抜き取り願田に生け置

イバチ マイナシ ソーチバシ
ブバマ ブナリン ウンチチェシ
ニゲーヌ グシパナ トウリカワシ
イワイヌ サカジチ スルクトウエ

強飯の初を前に飾りお清めをして
伯母様、姉妹にも声を掛けてお呼びして
種子取祈願の神酒を互に取り換えて
お祝いの盃を上げることです

種子取口説の解説

昔は年に一度しか作付できぬ稲作だった。播種が終わればヤーマチといって、一週間ほどは心身を清浄にし、家族一同も身を慎み、三味線、歌舞音曲を厳にいましめ、食用米の精白のための杵の音すらも小さく押さえ、子供が泣かぬよう、大声を出さぬよう、細心の注意を払い、ひたすら稲の種子の生育が順調で、鳥獣の害もないよう祈り、方言でブナリ神（カン）と敬っておよびする叔母、伯母、姉妹を招き、神仏と家の守り神であるヤーカザシに祈願し、盃をくみ交わす習慣であった。

イバチは、糯米のおこわの一種である。藁を一尺程に切り、お盆かお膳に敷いて、糯米のおこわを三角形に握り、上を尖らせ、裾を広がるように三角型に握った強飯のことである。ソーチというのは、心身ともに清浄にすることをいう。古語の「さうじ」つまり精進である。イバイ。イバイ草フサともいう。根が強いチカラシバという草である。ユシキは、稈が太くて強いススキである。アフは、担い棒、天秤棒のことである。第四句の「クルキン」は意味がよくわからない不祥語であるが、とりよせたイバイ草とユシキの中から生きよいの良いものを抜き取って苗代田に差す習慣であった。

マイミキヌアヨー

米神酒のアヨー

一、マイミキヌ フクイバナ

米の神酒の発酵しはじめの香ばしさは

ナンドウンヨ マサル

何よりもすばらしい

二、ムチアーヌ ミキ サントウネバ

糯米の神酒の発酵は

ナンドウンヨ マサル

本当に香ばしい

三、タクチキヌ フクイバナ

タクチキ（未詳語）の発酵しはじめは

ナンドウンヨ マサル

何よりもすばらしい

四、ナカヌ スザ ビキリヤマヨ

中の兄さん方も

オリヤンナヨ

良くお出下さった

五、バヤヌ ビキリヤ ビキリヤマヨ

我が家の兄弟よかわいい兄弟よ

ウヤシヨリヨ
 六、ダデイフタニ マイノリダニ
 オリヤンドヨ
 七、イモルミジ ヌミキサヌ
 ビキリヤマヨ
 八、クモリミジ カチキサス
 ビキリヤマヨ

お神酒を召し上がって下さい
 ダンチクのように稲が育った稔り田に
 祈願しに来ましたよ
 クワズイモの葉に汲んだ水より少ない神酒も
 干し切れない かわいい兄弟よ
 田の水溜まりよりも少ないお神酒も
 呑み干しきれないよ かわいい兄弟よ

米神酒のアヨーの解説

米の神酒（ミキ）、白酒（ミシ、ミシヤグ）もできばえよく、香ばしい。その喜びを兄妹で分かちあった。神酒白酒を差上げたが、兄弟達はイモルに入れた僅かな酒でも呑み干しきれなかった。

サントウンネバ、とタクチキは、現在のところ不祥語である。ダデイフは竹に似たダンチク。西表の普通の方言ではダードーという。クモリ水は、田の整地後に残った凹地に溜まった水、イモル水は、クワズイモの葉で作った使い捨ての簡単な飲み水入れの水。

シパヨヒユングドゥ

印結びのユングドゥ

一、ウブヌガヤヌ シパヨヒヨ
 スリマラギ シパヨフ
 二、ヤマヌキヌ シパヨヒヨ
 ムトウバフミ シパヨフ
 三、ミヤラビヌ シパヨヒヨ
 キムバミリ シパヨフ
 四、シババヨヒ アダスヌヨ
 キムバミリ アダスヌ
 五、チクブザヌ タクマスヨ
 サジブダヌ シナダス
 六、イシャナギ タビウケクデイヨ
 ミウマイ タビウケクデイ
 七、ユルシヒリ チクブザヨ
 キムヤイヒリ サジブザ
 八、ユルスクトウ ナラヌヨ
 キムヤイクトウ ナラヌス
 九、ナクナクトウ ユムユムトウヨ
 ミウマイタビ ウケケケ
 一〇、チクブザヌ サリパリヨ
 サジブザヌ サリイヒ
 一一、マキクシニ ミリバヨ
 フビスラシ ミリバドゥ
 一二、チクブザトウ フタナリシヨヨ

野原の茅の所有の印は
 切り取り束ねて棒に抜き立てておく
 山の木の所有の印は
 根元を踏み確かめて印をつける
 我が妻にしようと思うひとは
 氣立てを見て約束する
 乙女の氣立てを見て
 約束してあったが
 チクブザ役人の企みに
 サジブザ役人の仕様によって
 石垣の御飯屋の用役に
 出向いてこいと言いつけられ
 許して下さいお役人様
 差し替えて下さいお役人様
 許すことはできないよ
 胆入れにし差し替えることもできない
 泣く泣く嫌々ながら
 御用旅を終えてきたら
 チクブザが連れ去って
 サジブザが連れて行ってしまった
 垣根ごしに見れば
 首をそらして見れば
 チクブザと二人で

サジブザトウ フタナリ
 一三、トウルヌピバ マイナシヨ
 カラヌピバ ナカンギミ
 一四、サニサニシ ビリブンガヨ
 トウクトウクシ ビリブンセ
 一五、フビバダギ ビリブンガヨ
 ムムヤラビ ビリブンセ
 一六、ウリミリヌ ニタサヌヨ
 クリミリヌ シンサヌ
 一七、ンニバヤミ ブラルヌヨ
 キムバヤミ ブラルヌヨ
 一八、ウディバブリ シティラルバヨ
 パイバブリ シティラルバ
 一九、チキクルシ シティラルバヨ
 キリクルシ シティラルバ
 二一、イシバ トウリナンギヨ
 バヤニ ムドウリイフ

サジブザと二人して
 灯火を前にして
 暖炉を中にして
 うれしそうに楽しそうに
 安堵の体で座っている
 頸を抱いて座っている
 腿を突き合せて座っている
 それを見ればねたましく
 これを見れば辛く苦々しい
 胸が痛くて見ていられない
 憎たらしくて見ていられない
 腕を折ってやりたい
 足を折ってやりたい
 突き殺してやりたい
 蹴り殺してやりたい
 石を取り投げつけてやり
 我が家に戻った

シパヨヒユングドゥの解説

役人の意図を知りながらも、百姓なるが故、反抗することも拒否する事もできぬ惨めさ、役人の意のままに、公用をすませ、僥幸を念じつつ帰宅したが、案に違わず、女は役人の賄女にされている。泣くに泣けず放心、一夜試みに覗き見たら、憎い奴二人、頬を寄せあい、首を抱いて我が世の春といったところ。畜生どうしてくれようと怒りがこみあがるが、役人の仕返しを考えると後が怖い。仕方なく思いのたけをこめ、石を投げつけてやった。

百姓の惨めさ、悔しさが遺憾なく表現されていて、封建制下の暗黒時代を想いやられて痛ましいかぎりである。

ウナザシユングドゥ

宇奈利崎のユングドゥ

一、アサバナニ ウキティヨ
 カンジルバ ピッチノヒ
 二、マイヌ パマニ ウリティヨ
 ウブパマニ スリティヨ
 三、ヤラビケーヤ フニトウリ
 ウブナマーヤ ヌリオーラ
 四、クギナクギ ヤラスケ
 ユシナユシ ヤラスケ
 五、トウベラマディヌ ソーヤヤヨ
 ミウトウカイシャディ ミルソンネ
 六、クギナクギ ヤラスケ

宇奈利崎のユングドゥ
 早朝起き抜けに
 弁当入れを肩にかけて
 前の浜辺に下りて
 大泊浜に揃って
 若者達は舟をとりよせろ
 大人達はそれに乗ろう
 舟を漕ぎに漕ぎ行く程
 寄せに寄せれば
 トウベラマという夫婦岩は
 夫婦の睦まじさを見るようだ
 舟を漕ぎに漕いで行けば

ユシナユシ ヤラスケ 寄せに寄せれば

七、ウタラデイヌ ソーヤヤヨ ウタラの浜辺の夫婦岩は

ミウトウカイシャデイ ミルソソネ 夫婦仲良く寄り添うように見える

八、クギナクギ ヤラスケ 漕ぎ漕ぎ行く程に

ウナザシミズン クイバダリヤン ウナリ崎の深海も何なく渡りきった

九、ユシナユシ ヤラスケ 寄せ寄せ行く程に

スギバンパマナナ クイチキャン スギバンの浜に漕ぎ着いた

一、パガムヌケーヤ フニウキリ 若者達は潮時を考えて舟を浮かべなさい

ウブナマーヤ ウリオーラ 大人たちは舟を降りよう

一一、ユニヤナラバ パイサクフ 日暮れになれば早く来なさい

ニビサソーヤ クイチキリ 遅い人には声をかけなさい

一二、スギバンパマニ ウリティヨ スギバン浜に降りて

ウブパマニ スリティヨ 大泊浜に集って

一三、パガムヌケーヤ フニトウリ 若者たちは舟をとれ

ウブナマーヤ ヌリオラ 大人達は乗りましょう

一四、クギナクギ ヤラスケ 漕ぎに漕ぎ行けば

ユシナユシ ヤラスケ 舟を漕ぎ寄せれば

一五、ゾンパラマヌ ナリシキバ 艫べその鳴る音を聞いたら

ユビヌ クトウドウ ウビダス 昨夜の夫婦の営みを思い出した

一六、クギナクギ ヤラスケ 漕ぎ漕ぎ行けば

ユシナユシ ヤラスケ 舟を漕ぎ寄せれば

一七、マイヌパマナニ クギチキャン 村の前の浜に漕ぎ着いた

ウブパマニ クイチキャン 干立の大泊浜に漕ぎ着いた

一八、パガムヌケーヤ フニウキリ 若者たちは干上がらぬよう舟の碇をおろせ

ウブナマーヤ ウリオーラ 大人たちは舟を下りよう

一九、アツアンオーラ バガムヌケ 明日も行こう若者達よ

アシティンオーラ ウブナマ 明後日も行きましょう大人方よ

ウナザシユングドウの解説

ウナリ崎の畑耕作に伝馬船で往来する際の道行き歌で、行き来の際見る二つ並んだ岩礁を夫婦と見立てて、夫婦和合の証として受け止め、かく有りたいと願う。舟の艫を漕ぐ艫べその軋む音には昨夜の夫婦の営みを思い出したとまことに風刺に富んでいて着想が秀逸である。そこには、何のいやらしさもてらいもなく、自然に口から出たもので、何の不快感も感じられない。なお、ソーヤというのは、海中にある独立した岩礁のことである。

ヌチガフユングドウ

生命果報ユングドウ

一、カーヌパタサヌ アブタマ

井戸のそばにいる 蛙に

パニバムイ トウブケ

羽根が生えて 跳ぶまで

バガケーラヌ イヌチ

(囃し くりかえし) 私たち皆のいのちが

シマトウトウミ アラシヨリ

(囃し くりかえし) 島と共にありたい

- 二、ヤヌマルヌ キザメマ
ウブトウウリ ヤクナルケ
家の周りの カタツムリが
海に降りて ヤコウガイになるまで
- 三、ヤドウヌサンヌ フダチメマ
ウブトウウリ サバナルケ
雨戸の棧にいる ヤモリが
海に降りて 鱧になるまで
- 四、ムリムリヌ ヤメメマ
ウブトウウリ カミナルケ
森に棲む 山亀が
海に降りて 海亀になるまで
- 五、グシクヌミイヌ バイルレマ
ウブトウウリ ザンナルケ
石垣の隙間にいる トカゲが
海に降りて ジュゴンになるまで
- 六、プシキヌシタラヌ キザゴーマ
ウブトウウリ ギラナルケ
マングローブの下の シナレシジミが
海に降りて シャコガイになるまで

ヌチガフユングドゥの解説

不可能を可能にしたい願望で、宇宙の悠久に比べ、人間の生命の儚さは、草葉に宿る朝露のごときものである。各章に唄った文言は、あり得ぬことを、小動物のなぞらえてかくありたいと心情を吐露してい余す事がない。これは皆の願望でもある。文明にとりのこされたような辺地のこの島にこのような雄大な比喻を唄っていることあは、驚きとともに、誇りに思う。この歌を先人の徳として末長く伝えていきたいものである。

プシキのユングドゥ (浦内村の古謡)

- 一、ウブカラヌ パタサナ
プシキヌ ムイソーヤ
大川の端に
マングローブが生えているのは
- 二、ミナトウバダーナ ムイ
ヤラザバダーニ ムイル
潮水と真水の混じる所に生え
湿地帯に生える
- 三、ユダバ イデイ ムイ
マタバ イデイ サカル
枝が出て生え
又を出して成長する
- 四、ウルチムヌ ナリヨツタラ
バガナチヌ イフダラ
初夏の季候になったら
万物の活きづく頃になったら
- 五、パナディアル パナサキ
ナリディアル ナレーナルソ
万物の花は咲き競い
やがて実を結ぶ
- 六、パイカジヌ ウスダラ
ブンパヌカジヌ イフダラ
暖かい南風がそよぎはじめたら
季節風がおさまったら
- 七、パナディアル パナウテイ
ナリディアル ナレーウテイ
花も役目を終えて落ち始め
実も摂理に基づき落ちる
- 八、ミナトウバダナ ウテイ
ヤラザバタナ ウティル
湊の川端に落ち
山の際地近くの湿地帯の泥土に落ちる
- 九、ピシスーナ イデー イヒ
ピシスーニ ソンガレ
引き潮と共に出ていき
引き潮に引き流され
- 一〇、ウナザシ ミズ イデー イヒ
ユニヌ フカ ナガサレ
ウナリ崎湾内に出て行き
砂の堆積より外に流され
- 一一、サイナンナ ムマリ
小波にもみくちにされ

- ナンバラニ クルバサレ
 潮流に転ばされながら
 一二、ミチスーナ ソンガレ
 満ち潮に引き戻され
 マンスーニ ペーリキヒ
 満潮に引かれて入り来て
 一三、ユヌ ミナトウ ペーリキヒ
 同じ川端に入り
 ユヌ ヤラザ ペーリキフ
 同じ湿地帯の泥土にたどりつく
 一四、ドウルヌ ミーバ ヤーシ
 泥土に居つき、
 ミタ フサラバ ヤース
 同じドブ泥に根付きする
 一五、ミナトウバダーナ ムイ
 川岸近くに居ついて生え
 ヤラザバダーナ ムイル
 泥土の中に生育する

プシキのユングドゥの解説

マンガローブの生態を歌ったもので、着眼が素晴らしい。現在のわれわれには、到底足下にも及ばず、脱帽のみである。初夏になり花をつけ、実になって生育し、そして落ちる種子は細長く、手の中指ほどもある。落ちた種子は、引き潮に流され、沖合遠くまで流されるが、上げ潮で戻ってくるのは、途中何かに引つ掛かっていたのか、潮とともにもどってくるが、それは僅かにしか過ぎない。

落ちる箇所が泥土であれば、そのまま突き刺さって生える。その繁殖力は旺盛で、二、三〇年経てば目を見張るものがある。耕作に往還した時分にみたウマタ・クマタのヒルギ林は疎林であったが、現在では密生していて目的地を見失いがちで、慣れぬ人は迷ってしまう程である。

このユングドゥは郷土史に興味のなかった三〇代の頃、叔父である糸数寛次と母サカヤから聞き書きしたもので、今では音符が全く思い出せず、念を入れて習熟しておくべきだったと臍を噛んでいる。元の南風見村にもプシキユングドゥがあるのを知ったが、その村人達が何処へ転居したか不明で、尋ね歩いているが尋ね当たる事が出来ずにいる。せめて小底の婆さんでも存命中であればと残念。私が知っている浦内村唯一の古謡で後世のために記しておくことにした。

イニガタニアヨー

稲が種子アヨー

一、イニガタニ イキディクヨ

稲種よ落ちこぼれなく芽を出してくれ

ケーラマイ

皆の稲よ

イトウバホーベー トウラレソーヨ

糸がもつれるように給われよ(繰り返し)

二、ナシルダニ タニウリダニ ウルシャル

苗代田に種をおろし田に蒔いた稲の種よ

三、シタカイヤ シルニヤウリ

下のほうには白い根が

ウイカイヤ ヤバパムイ

上のほうには若芽が萌えて

トウンディクヨ

萌え出してこい

四、インヌキニ マヤヌキニ マサラシ

犬の毛猫の毛よりもまさって

五、ナリフドゥヌ タキフドゥニ スユラバ

実るほどに丈高く太くなれば

六、ナシルダカラ ヤシキカラ

苗代田から苗代田の榊から

トウリナシ ピキナシテイ

取り束ね引き束ねて

トウラレソーヨ

給わるよ

七、タバルカチ マシヌカチ イビオラバ 田原毎に田んぼ毎に植えたらば
 八、バガイビヌ クリヤサシヌ ニカヌユヤ 私が植えた念入りに差込んだ苗が今夜の
 九、カンヌミジ ヌシヌミジ アモーサバ 神の恵みの雨水守り神の雨水に湯浴みし
 て

一〇、ウルチムヌ バガナチヌ ナリヨーラバ 陽春の初夏になったら

一一、ユシキダキ イバイダキ ススキのようにチカラシバのように

ムトウミヨーリ 稗強く根を広げ

一二、イディブリヤヌ ナリブリヤヌ 穂が出る時に稔る時分に

ナリヨーラバ なったなら

一三、ウブプダニ ナープダニ タボラリ 大きい穂に長い穂にして下さい

一四、イシヌミニ カニヌミニ 石よりも鉄よりも堅く

マサラシ 締った実にしてください

イトウバホーベー イシニヤグヨ 糸がもつれるよう石の堅さのように

イニガタニアヨの解説

苗が犬や猫の毛のようにふさふさと生育し、田原毎の田んぼに植えられ、鳥獣の害もなく育ちが順調で出穂期には、根もチカラシバのように四方に張り、根強く、茎もススキのごとく太く強くして倒伏もせずに生え揃い、穂は長く大きく、粒はぎっしり根元から穂の先まで揃い、収穫が出来て豊年万作をもたらしてください、と稲の生育の段階を踏まえて祈りを込めた歌をうたう。

ナカザラ (舟浮村)

一、ナカラザヌ ウミシヤグ

ウヤシバドゥ ユーナウレ

中皿

中皿に入れたミシヤグ(御神酒)は

召し上がってこそ世は治り豊年を迎えられ

る

ウヤキ ユウナウリヤ ユウナウリヤ

(囃子)

二、ウヤキ ナカザラユ

豊年の中皿のミシヤグは呑んで

パヤシバドゥ ユナウレ

囃してこそ世は治る

三、ニウスイヌ ウミシヤグ

役人も百姓も差別なく呑むミシヤグを

ウヤシバドゥ ユナウレ

召し上がってこそ世は治る

四、ウヤキ ニウスイユ

役職の者も百姓も共々に呑み交歓して

パヤシバドゥ ユナウレ

囃してこそ世は治る

ナカザラの解説

他の西表の村同様、昔は干立村にも中皿、角皿の歌謡があったと思われるが、残念のことに今日まで伝承されていない。ただ、ミシを中皿や角皿に注ぐ容器のバダシだけがあったと言われている。そこで、参考までに、現在舟浮村で歌われているものを収録しておきたい。

ミシヤグは、昔は、生米とご飯を乙女が嚙んで発酵させた酒で、ミシとも言った。現在では、米を水に浸して摺り鉢で摺り、粉にして水とまぜ、発酵させて造っている。舟浮村

では、中皿と角皿は、御嶽の氏子が勢ぞろいしたミヤの広場（カザリバ）で歌うものである。ミシを入れたバダシという容器を捧げもった者と、中皿、角皿を捧げもった者の二人で、ミシを注いで、まず、神司とチジビに捧げる。これをうけた神司、チジビは、中皿の歌にあわせて中皿の盃を敬虔に身体の上に左上にと捧げて口を付けて飲む。このあと、ミシをつぎたしながら、来賓氏子一同にもれなく行き渡るようにして中皿角皿の儀式を終える。三句、四句にでてる「ニウスイ」というのは、はっきりわからない言葉だが、ニ根、スイ根と解釈すれば、「根から末まで」という意味として解釈している。三句目は「士族も平民も差別なくともにミシヤグをいただいて」という意味である。

チヌザラ

一、キヌヌピバ ムトゥバシ

ムトゥスイ ユウナウレ

ムトゥスイナウレ マモリタボレ

角皿

今日の日を 元にして

根も末も 穏やかに

（囃し）根元も末も差別なく お護り下さ

い

二、クガニピバシ ムトゥバシ

三、フシタティムラ ウイナカ

四、フクイムラ シナカニ

五、ミリクユバ タボラレ

六、ノーリユバ タボラレ

七、ミリクユヌ ウニガイ

八、ノーリユヌ ウニガイ

黄金のような吉日を 元にして

干立村の 全域に

福徳村の 村内に

弥勒の世を 給って

稔りの世を 給って

弥勒の世を お願いしよう

稔りの世の お願いしよう

チヌザラの解説

干立村では、ミシ入れをバダシと言う。ここでは、舟浮村の祭儀を書いた。当干立村では、中皿、角皿、バダシの祭具もなく、中皿も角皿も戦後歌われなくなって久しい。このままでは、何十年か後に、この祭儀も忘れさられるのではない。なぜ中絶してしまったのか、その理由は不明で、昔からの床しい風習が失われたことは遺憾至極である。ぜひ復活したいものである。

一口囃子「グマピトゥタイ」（浦内村）

一、グマ ピトゥタイ グマ ピトゥチャ

二、グマ フタタイ グマ フタチャ

三、グマ ミータイ グマ ミーチャ

四、グマ ユータイ グマ ユーチャ

五、グマ イチタイ グマ イチチャ

六、グマ ムータイ グマ ムーチャ

七、グマ ナナタイ グマ ナナチャ

八、グマ ヤータイ グマ ヤーチャ

九、グマ クヌタイ グマ クヌチャ

一〇、グマ トウータイ グマ トウーチャ

胡麻一束 胡麻一桮

胡麻二束 胡麻二桮

胡麻三束 胡麻三桮

胡麻四束 胡麻四桮

胡麻五束 胡麻五桮

胡麻六束 胡麻六桮

胡麻七束 胡麻七桮

胡麻八束 胡麻八桮

胡麻九束 胡麻九桮

胡麻十束 胡麻十桮

一口囃子「タイピトゥタイ」 (浦内村)

- | | | | | | |
|-------|-------|----|-------|-------|------|
| 一、タイ | ピトゥタイ | カイ | ピトゥラ | 炬火一束 | 蟹一匹 |
| 二、タイ | フタタイ | カイ | フタラ | 炬火二束 | 蟹二匹 |
| 三、タイ | ミータイ | カイ | メーハラ | 炬火三束 | 蟹三匹 |
| 四、タイ | ユータイ | カイ | ヨーハラ | 炬火四束 | 蟹四匹 |
| 五、タイ | イチタイ | カイ | イチハラ | 炬火五束 | 蟹五匹 |
| 六、タイ | ムータイ | カイ | モーハラ | 炬火六束 | 蟹六匹 |
| 七、タイ | ナナタイ | カイ | ナナハラ | 炬火七束 | 蟹七匹 |
| 八、タイ | ヤータイ | カイ | ヤーハラ | 炬火八束 | 蟹八匹 |
| 九、タイ | クヌタイ | カイ | クヌハラ | 炬火九束 | 蟹九匹 |
| 一〇、タイ | トゥータイ | カイ | トゥーハラ | 炬火一〇束 | 蟹一〇匹 |

一口囃子の解説

この囃子は、一口一息で一番から十番まで囃さなければならぬもので、不出来の時は罰として湯飲み一杯の酒を一息で飲み干さねばならず、酒好きの人は喜んだ。酒の呑めぬ人、嫌いな人は呑みあぐねて泣く人、逃げ出す人もあった。種まきのヤーマチ（謹慎）終了日の酒座の座興であった。アヨウ、ユングドゥなどいちおう済んだ後、次の家に立つ前に囃された。今では囃さなくなつて久しい。少年の頃、浦内村在住の折、見聞いたものである。参考までに記した。

ターウビジハラバ

- | | |
|------------|----------|
| 一、キヌヌピバヨ | クガニピバ |
| シラビヨリーヨ | |
| サーユイサヌ | シューラヨイーヌ |
| ユバナウレ | |
| 二、ウヨンドバヨ | ナガマシバ |
| イビチャルヨ | |
| 三、バガイビヌヨ | クリヤサシヌ |
| ニカヌユヤ | |
| 四、カンヌミジヨ | ヌシヌミジ |
| アモウサバヨ | |
| 五、シタカイヤヨ | シルニヤウリ |
| ウイカイヤ | ヤババムイ |
| 六、ウルチムヌヨ | パガナチヌ |
| ナリヨーラバヨ | |
| 七、ユシキダギニヨ | イバイフサニ |
| ムトウミヨリーヨ | |
| 八、イディブリヤヌヨ | ナリブリヤヌ |
| ナリヨーラバヨ | |

田植えジハラバ

今日の日を黄金のような

良い日を選んで

(囃子)

(囃子) 世は治れ

祈願する田の長い田に

植え付けた

私が植えた差し込んだ

稲苗は今夜の

神様の恵みの雨、守り主の雨を

浴びて

根元には白い根がはえ

上には若葉が萌えて

陽春の若夏に

なったら

ススキのようにチカラシバのように

根を広げて稈を強くして下さい

穂が出る時期、稔る時期に

なったら

九、ウブプダニヨ ナーポダニ

タボラルヨ

大きな実を長い穂を

賜りますように

一〇、イシヌミニヨ カニヌミニシ

タボラルヨ

石のように鉄のように堅い実を

賜りますように

一一、ウヌカフドゥヨ クヌニガイ

ニガユルヨ

この果報をこの願いをこめて

祈願します

ターウビジラバの解説

このジラバは、田植を終えて家に帰る道すがら毎日歌われる。ユイに参加した人も賄い人も揃って、自然に二分され前半の者が歌い出し、中途から後半の者が歌う。ちょうど二部合唱のように歌われる。西部幹線道路の中途にあった「アハマラ石」あるいは「アハラ石」ともいう石は、牛が寝たかっこうの砂岩で、作業を終えて帰宅する者の休憩地になっていた。足の早い若者達はここで老人や足の遅い賄い女達を待ちあわせ、勢ぞろいして帰った。この岩も、幹線道路の開削で破砕され、なくなった。干立村の歴史を見つめてきて、休憩地になっていたこの砂岩は、破砕されて泣いているだろう。

稲作にあたっては、種子取り（種おろし）のヤーマチで謹慎して苗の生育をひたすら待ち望んで、やっと田植えにこぎつけ、ほっと息抜く暇もなく、田植えをして後の水加減、管理、除草、害鳥害獣対策などが待っている。手をつくして足りない所はやはり神仏の加護を祈るしかなく、かくあれかしと祈願する百姓の気持ちは諒とすべきである。そして、このジラバはそうした百姓の願望を余すことなく歌っている。

豊年祭とその歌

グジンフ

御前風

一、クトウシ ムジクイヤ

今年の作物は

アンチュラサ ユカティ

例年に増してすばらしい

クラニ チミアマチ

蔵に積み余して

マジン サビラ

稲叢（マジン）にしておこう

二、フバナ サチチリティ

稲穂の発芽もよく

キジンサビン ネーラン

何のさしさわりもなく

シラチャニヤ ナビティ

みのった稲は揃って

アブシマクラ

畦を枕にする程だ

グジンフの解説

これは、沖縄島のマジンのグジンフをそのまま借用している。

マジンは沖縄の方言で、稲叢のことである。干立村の方言では、シラと呼んでいる。在来米は庭に束にして積んでおき、必要に応じて抜き取り、精米、精白した。

ヤラヨ

一、ヤラヨイ タキバルヌ フクラニ

嵩原（旧名）の村内に

ヤラヨイ （くりかえし）

二、ヤラヨイ フシタティヌ シナカニ

干立の村中に

三、ヤラヨイ ミリクユバ タボラリ

弥勒の世を賜った

四、ヤラヨイ ユガフユバ タボラリ

世果報世も賜った

五、ヤラヨイ ミリクユヌ ヨイドウス

弥勒世のお祝いをしよう

六、ヤラヨイ ユガフユヌ ヨイドウス

世果報世のお祝いをしよう

七、ヤラヨイ マブルシュン メヒンダラ

守り本尊もひとしおだろう

八、カルヤシュン ユクンダラ

加護を賜る神もそれ以上だ

九、ヤマニンズン サカリヨ

お嶽人数一同栄えよう

一〇、バガケーラン ブドウリヨ

我等一同も踊りましょう

アパレ

一、アパレ タキバルヌ フクラニ

嵩原（旧名）の全域に

二、アパレ フシタティヌ シナカニ

干立村の村中に

三、アパレ ミリクユバ タボラリ

弥勒神が御出て豊作だった

四、アパレ ユガフユバ タボラリ

果報の御世を賜って豊作だった

五、アパレ ミリクユヌ ヨイドウス

弥勒神のお祝いをしよう

六、ユガフユヌ ウニガイ

果報を賜うようお願いします

七、マムルシュン メヒンダラ

守り本尊もひとしおだろう

八、カルヤシュン ユクンダラ

加護を賜る神もそれ以上だ

九、ヤマニンズン サカリヨ

お嶽人数たちも栄えさせてください

一〇、バガケーラン ブドゥリョーラ
 一一、ガラマヌキ ヌキショーラ

我等一同も踊りましょう
 勾玉も首にかけて踊ろう

ハヤツサ

豊年祭の旗頭の道行き歌

一、タキバルヌ フクラニ ハリ

嵩原村の村中に

フシタティヌ ソーナカニ

干立村の真ん中に

チコジコツコ ソー ज्याヌ ウスマイ

(囃子) チコジコツコ ソー ジ家のおじい

さん

二、ミリクユバ タボラリ ハリ

弥勒の世の中をいただき

ユガフユバ タボラリ

豊年万作をいただき

三、ミリクユヌ ヨイドウス ハリ

弥勒の世のお祝をします

ユガフユヌ ヨイドウス

豊年万作のお祝をします

四、マブルカン サニシャル ハリ

守り神もうれしい

カルヤカン サニシャル

果報の神もうれしい

五、ヤマニンズン サカリョーラ ハリ

御嶽の氏子も繁盛しよう

バガケーラン ブドゥリョーラ

我等一同もその喜びを分かち踊りあかそう

ハヤツサの解説

ソー ज्याというのは、古い屋号のひとつ。ウスマイは、士族のおじいさんへの敬称であるが、なぜこのように囃すのかわからなくなっている。

ソール（お盆）の歌

干立村のソール念仏（無蔵念仏）

鳩間島の伝承を参考に六番の欠落の補正を試みたもの

- 一、親の御恩は深きもの
父御の御恩は山高さ
母御の御恩は海深さ
- 二、山の高さや探からん
海の深さん探からん
昼は父御の膝が上
扇子の風に煽がれて
夜は母御の懷に
十重も二十重も衣裳の内
濡りる方には母寝て
乾らぐ方には子ゆ寝して
諸共濡れば胸の上
- 五、是程親に念われて
年や一〇、二〇才になゆれ共
親の御恩は未だ知らん
命ゆ捨て体朽ち果てて
散りての後ど哀知る
散らなみらりば哀りなし
- 七、大白星の上りば門に立ち
日元の下りば辻に佇ち
我親待てども待ち兼ねる
島の島々廻れ共
国ノ浦々参れ共
我親似る人拝まらん
- 九、アサギの浜迄参れ共
猿掻き山ば押し分けて
青苔生いたる墓標
- 一〇、其晩や墓場に仮寝とり
其晩の夜半に夢拝て
二人の親の現りて
- 一一、寢覚に探りば父も無し
飛び起き尋りば母も無し
父呼び母呼び声すれば
- 一二、声あるものは山響
再度ものにだまされて

之程浅間しき事はなし

一三、それから我家に立歸えり

父御の形見を取り開き

母御の手束取り眺めて

一四、それ見る涙の止まらん

諸袖濡れば腕流し

行く人来る人哀れがる

其様なる事には親のためとなる。

念仏句（鳩間村）

これは鳩間村に伝承されているものの冒頭部分である。

一、ウヤヌウグヌハ フカキムヌ

親の御恩は深きもの

チチグヌウグヌハ ヤマタカサ

父御の御恩は山高さ

ハハグヌ ウグヌハ ウミフカサ

母御の御恩は海深さ

二、ヤマヌ タカサヤ サバカラン

山の高さは捌かれぬ

ウミヌ フカサヤ サバカラン

海の深さは捌かれぬ

ヒルハ チチグヌ アシガウイ

昼は父御の脚が上

三、オンギヌ カジニ アウガリテイ

扇の風に煽がれて

ユルヤ ハハグヌ フトウクルニ

夜は母御の懷に

四、ヌリルカタニハ ハハヌ ニテイ

十重も二十重も衣裳が内

カワクカタニハ クユニシテイ

濡れる方には母が寝て

五、クリフドゥ ウヤニ ウムワレテイ

乾く方には子を寝して

ムルトウム ヌリリバ ムニガウイ

諸共濡りば胸が上

六、チリテン ミテクシン

是程親に思われて

ウヤヌ ウグヌハ マダシラン

年は二〇才になれども

（不祥）

親の御恩は未だ知らん

アワリシリ

哀れを知り

チリラナ ミラリバ アワリナシ

散る所を見れば哀りなし

以下は干立や祖納の念仏と同じなので省略するが、特に第六句は祖納、干立の両村にはない句であるので、注意したい。

ソール念仏の歌詞の解説

ソール念仏は故小底ブナリさんと故糸数寛次さんより聞き書きした。昭和四三、四年の事である。六番の後句「チラナミラリバアワリナシ」は覚えていたが、「歌い出しの句を忘れ思い出せない」との事であった。兄弟の七月念仏「ルクシャ、ルクユ」七日七夜の二句が欠落している事が判り、本歌六番の「チリテンミテクシン アワリシリ、チラナミラルバアワリナシ」は欠陥のまま鳩間村に伝わっている事が判った。口こみの伝承で欠落は止むを得なかったと思う。そのままでは解釈出来ないで、義父美佐志加那の存命中に欠

落部分の意見解釈を求め、欠落部分の補完を行った。「チリテン」は命を失う事で「命を捨て」と解し「ミテクシン」は身の朽ちる事が妥当であろう、とした。そう解すれば、次の「アワリシリ」に素直に繋がる。「チラナミラルバアワリナシ」は正常でそれで良く、「命が亡くなり身体が朽ち果てれば現世の非情さが、死と言う現実が無ければ哀れさはない」つまり「ヌチンティミクチハティティアワリシリ」「チラナミラルバアワリナシ」と解した。

然し此の解釈が正しく欠落部分を補うものだと押し付けるつもりはない。人それぞれの解釈は自由であるからだ。なお鳩間村には他に兄弟の七月念仏がある。叔父寛次さんの存命中ソール（お盆）毎に唄っていたので書き取ったが重複が多く欠落部分がある様で意識出来ず途中で投げ捨てた。後日昭和五四、五年の頃と思うが、鳩間島より兄弟の七月念仏を送ってもらいその全容が判り本歌の脱漏部分も補う事が出来たのは幸いだった。ソール念仏と兄弟の七月念仏は不離一体と思われる、ディンサ節と共に上原村が発祥の地だ、と義父美佐志加那はプレー家の大浜正良爺から聞かされたという。

兄弟の七月念仏は幼く貧しい兄弟に託して唄われ、貧しい故にお寺参りの供養を拒まれ野山の木の実、生り物を取り集め、甘蔗の梢末を生花に残りを方寸に切り束ね件の果実等を之に差し祖霊を迎え、且つ外棚をしつらえて瓜や茄子、紫蘇葉を切り刻み揆き物として備え置き悪鬼悪霊や供養する者の断えた亡者等の集まり来るのを之で揆き払い、六日六夜にわたり書き上げた経文を、七日七夜かけ詠み上げ供養したと。

七月念仏に唄われている木の実や成り物等供える風習は今でも受け継がれて来ているが、それを唄った肝心の七月念仏の兄弟の句が干立祖納の両村に何故か伝承されていない様で不思議に思う。その原因は不明である。

戦後二三、四年頃黒島寛松さんが念仏を書きプリントして青年に唄わせ、途絶えていた踊りも復活させた。しかし同氏の念仏は、口こみの欠陥から六番や兄弟の念仏句を落としていたのであった。もちろん、私が六番の欠陥句や脱漏の二句のあるのを知ったのは鳩間村よりの念仏句送付によってではあったが、せつかくの復活の時にお年寄り年配の方達も欠陥や脱漏を正してくれなかったのは残念でならない。

欠陥脱漏を正して兄弟の念仏句も採録した本来の姿に戻したいものである。

七月念仏、兄の句（鳩間島）

一、ナムアミダブチヨ ミダブドウキ

南無阿弥陀仏よ弥陀仏

イマジユウサンナルヨ チグディンシ

今一三才になる稚児であるが

アヌヤマデイラニヨ マイラシバ

あの山寺に参詣して親の供養をしよう

二、ムチュルタカラヌヨ アリバドウス

持っている財貨の有るならばよいが

ムチュルタカラヌヨ ネナヤリバ

持っている財貨が無いので

アヌヤマデイラニヨ マイラサヌ

あの山寺に参詣できないと言われた

三、ムヌヌナチカシヨ ナチヌヤマ

ものの哀れさよ夏の山

フンニヨ アワリヌムヌ ヤリバ

本当に憐憫の者であるので

ニシカインカユテヨ キヨウモンバカキ

西に向って経文を詠み

四、ヒガシニ ムカユテヨ キヨウモンバユミ

東に向って経文を書き

ユムダル キヨウモンヤヨ チチヌタミ

詠んだ経文は父のため

カキダル キヨウモンヤヨ ハハヌタミ

書いた経文は母のため

五、ウキトウリ タマワリヨ チチヌウヤ
ウキサシ タマワリヨ ハハヌウヤ
ナムアミダブチヨ ミダブドウキ

受けとって下さい父の親
受けとって下さい母の親
南無阿弥陀仏よ弥陀仏

七月念仏、弟の句（鳩間島）

一、ナムアミダブチヨ ミダブドウキ
ワリラグユニンナルヨ イヤシングワーヌ
アヌヤマデイレニヨ マイラサナ
よう

南無阿弥陀仏よ弥陀仏
我等が四人の貧乏人の子が
父母の供養のためにあの山寺に参詣し

二、ムチュルタカラヌヨ アリバドウス
ムチュルタカラヌヨ ネナヤリバ
アヌヤマデイレニヨ マイラサヌ
三、フンニヨ アワリヌムヌ ヤリバ
ニシカインカユテヨ キョウモンバユミ
ヒガシニ ムカユテヨ キョウモンバカキ
四、ルクシャルクユニヨ カキアギテイ
ナンカナナユニヨ ユミアギテイ
ユムダル キョウモンヤヨ チチヌタミ
五、カキダル キョウモンヤヨ ハハヌタミ
アマリニ ワウヤヌ カナシサニ
ソーローヤ イチガデイ タンヌリバ
六、ソーローヤ シチガチ ナカヌ ソーロー
キヌナリ パチパチュ トウリカザリ
ナリムヌ シナジナヨ トウリスルイ
七、ウジヌ スラスラヨ イキバナニシ
ウリ ナシピヨ キザミテイ パンキムヌ
ウジキリ ムスビティヨ ウヤニマイラシリバ
えすれば

財貨をもっているならばよいが
持っている財貨が無いので
あの山寺に参詣供養できないと
本心に憐憫の者であるので
西に向って経文を詠み
東に向って経文を書き
六日六夜に及び書き上げて
七日七夜かけて詠み上げて
詠んだ経文は父のため
書いた経文は母のため
余りにわが親の懐かしさに
精霊日は何日かと尋ねれば
精霊日は七月中日の精霊日
木の実の初物を取り飾り
成り物の品々を取り揃え
甘蔗の茎の末を生花にし
瓜茄子を刻んではじきもの
甘蔗を切って結んで親にお供

えすれば

八、スレデモヨ ウヤヌタミトウナル

それでも親の供養になる

ウキトウリ タマワリヨ チチヌウヤ

お受けとり下さい父の親

ウキサシ タマワリヨ ハハヌウヤ

お受けとり下さい母の親

九、ウグヌ ハナヌ ミジン スイ

お供えの生花の水も添えて

シソヌパンキヌ ミジントウムニ

紫蘇の揆の水と共に

ヌクタル チャミジンヨ クブスユカ

残った茶湯の水も床下に零し

一〇、フカヤヌソーローヤヨ ソーローヌタミ

外棚のソーローは無縁仏のため

ウキトウリタマワリヨ ミダブドウキ

受け取りください弥陀仏様

ナムミダブトウキヨ ウクリンディムヌ

南無阿弥陀仏にお送りします

ソールのアングマ

ソールにはアングマが伴う、後生の祖霊がアングマに化身して現世に來り子孫と交歓し

親密さを深めて踊る。その踊りは昔は屋内と庭先に分かれていた。屋内は士族、庭先は平民という階級意識があった。戦後一時期までは各戸屋内で踊られ、大変賑やかであった。お面をかぶり、男性が女性の、女性が男性の恰好をして踊りの輪に途中飛び入りしてくるが、平素見慣れているものでも、それぞれ違った恰好をして入り交じるので、誰が誰かその見極めが大変で、お面をとってはじめて「なあんだ」という具合だった。

賑やかだった盆踊りも、若者たちが職を求めて遠く本土や沖縄本島に転出し、今では最盛期の一〇分の一に人員は減っている。過疎化の波には勝てず、今では各戸への訪問供養は取り止め、公民館広場で旧来の屋内と庭先の部分を併せ、しかも一夜だけで済ませている。

ソールのアングアの所作

太鼓は男子受け持ちで太鼓を据え膝を屈居し、体を左前方に移しながら右手の杓で打ち捨て、体を戻し左足を伸ばしながら左手の杓で打ち右下方に流す。その際右手の杓は右上方、左手の杓は右下方にある。

サンピキは専ら女子の受持で左手指に掛け下げ、指の開閉で打ち鳴らす。左斜め前に体を移しながら掌をサンピキの下の方を上に返し、元の姿勢に戻りながら左足をやや伸ばしてサンピキの上で掌を下に返す。サンピキ、太鼓共念仏歌の三味で拍子を取り踊るのが肝要で各戸に訪れこれを行う。道行きには「ホーホ」と唱え団扇を斜め上方に突き出し戻したら道行きし次の家に向かう。

干立村のシチ祭

シチ祭のあらまし

シチ（節）祭は西表島の西部地区の祖納、干立の両村では巳亥（つちのとい）の日が取り付き（始まり）である。ところが、舟浮、網取、崎山の各村では一日遅らせて行ったという。これは、役人の都合思惑でこうなったものの様である。

節祭り取り付きの夜はトゥシヌユー（歳の晩）といって年越しの振る舞いをいただく。翌日の庚子（かのえね）の日に、諸行事が干立御嶽のミヤ（中庭）で行われる。平民の干立御嶽が平民のみの御嶽になるまでは、上の御嶽でとり行なわれて来たようであるが、干立の人々が個人の御嶽を拝むようになってからは、このような習慣になっている。この祭は、最も重要かつ厳粛な行事であって、昔は親が死んでも葬式は出せず、行事への参加が義務付けられたというたいへん大きな意味を持つ祭祀であった。昔は平民のみの神事で、士族の人々は招待を受けて、祝宴に列席する習わしであった。

節祭の神事が午、寅、酉の神年に当たる時はキチガン（結願祭）があり、舞踊や狂言等の村芝居が奉納される慣例で大変賑わったという。キチガンは大東亜戦争後は行われていない。

節祭の準備と年越し

往昔は巳亥（つちのとい）の日を年のけじめの日とし、翌庚子（かのえね）の日を年初の日としたらしく、巳亥の日の夜は、方言でトゥシヌユーつまり年の晩と称して家内一同

の健康息災を祝い、年越しのフルマイ（振舞い、御馳走のこと）を戴く。

風波に揉まれ枝折れし碎片となって干瀬に打ち上げられたサンゴのかけらをナラ石（ナライシヤ）というが、年越しの晩までにこれを浜から持ち帰り、三味線蔓草（和名イリオモテシヤミセンヅル）を取り寄せ準備し家の守り神であるヤーカザシを始め、主な柱、臼、杵、鍋、釜、箆、長持ち等に結わえ付けて占有を示し、清めとする。続いてナラ石で床の間より屋内四隅の悪霊、亡者を払い屋外に追い出し、屋敷内東西南北くまなく払い、門口より追い落として悪霊亡者が屋敷内に戻り入らぬようナラ石で門口に一条の線を引き置く。こうして心身を清浄にし、年の夜を迎える年の無病息災をヤーカザシ、火の神に祈願し、祖先の御霊にも礼拝し年忘れをする。

節祭——式次第の概要

パーリヤ舟を漕いで、ミリク世を漕ぎ寄せる行事が、節祭の中心であるが、前日から当日の午前中に年配の方々が中心になって旗頭の飾り付け、化粧直しを行なって、節祭に支障のないようにする。また、潮時を考え、満潮になる前の時刻迄にそれぞれの家から御嶽に参集する。村の幹部は、青年の応援を得て会場の設営をし、婦人たちは神様へ供える料理と招待客のための料理を準備しおえ、神司、チジビに連絡をして潮時を待つ。神様に供える料理は、この項の末尾に記載してある。

一、ヤフヌテイ

オイサーのウダチ（公民館下）から干立御嶽前までの浜辺で行う。

二、パーリヤ舟おろしとミリク神迎えの神事

舟おろしとミリク神（粟神）をお迎えするためにトゥチ（船頭）は干立御嶽の神前に参り、チカラグシ（力神酒）を頂いたあと、乗船する。

三、祈願パーリヤ

舟子が舟のジラバを唄い舟出し、粟神のミリク神迎えの神事に移る。

四、節祭終了後のトゥリムトゥ（戸根元）への司供奉

ササラニシの通行古歌を歌い、旗頭を先頭に踊らせながらチカ（神司）とチジビを送り、トゥリムトゥ家のヤーカザシに棒技を二、三点奉納する。

御嶽のミヤで行う狂言棒枝

一、ティンジョティンパイ

二、アンガマ

イ、キユヌフクラシヤ

ロ、グサクテイ

ハ、グゴパ

ニ、フニヌク

三、狂言

イ、パチカイ

ロ、カビラバチカイ

ハ、ウシウイ狂言

四、ミリク菩薩のミヤ巡回

旗持ちの少年がミリクの両袖を持ち、供奉しミリク節でミリクの眷族（婦女子、男子の芸人数が参加、銅鑼、笛で音頭をとりながら広場を一巡する。

五、獅子舞

銅鑼、横笛で獅子を踊らせる。出場の笛と舞、踊らせるときの笛、及び退場の笛の奏し方はそれぞれ異なる（西銘次郎さん談）。西銘さんが郷中は同氏が奏したが、後を継ぐ人がいないので、出場、退場の笛は今のところ奏者がいない。棒技・獅子舞の時は、前鹿川徹夫さんが踊りの笛を奏している。

これで節祭の行事を終える。翌日、村建て当時より各家に掘抜き井戸のできるまで使用した水元のウイヌカー（上の塞井戸）とアダヌカーの塞井戸の浚えをし棒枝を二、三点奉納し各戸を訪れ悪霊払いをする。この井戸浚えには必ず獅子頭を先頭にしてゆく。

一 ダイグクヌミリク バガシマニ イモリ

クトウシカラ バガシマ ユガフデムヌ ユガフデムヌ

サーサーユーヤサ スリサーサー

二 クトウシユヤミリク ヤイヌユヤ ユガフ

ミティヌユヤ メヒン マサラシタボリ マサラシタボリ

三 ウスカジヌクガニ ミリクユヌ ウカギ

ウスカジヌタントウ チカシタボリ チカシタボリ

四 ミリクユヌイモリ ユガフユヌ ウカギ

キレムヌフナチン スルユティ ブドウリアシバ ブドウリアシバ

五、獅子舞

節祭の由来と穀御嶽

節祭の来歴は判然とせず記録もない。穀御嶽は義父美佐志加那の談によれば、八重山に伝来した五穀のうち粟種が一番早く伝えられ、干立村がその伝来地で北岸道路白浜線より村に入る右側にあるスーカー（潮井戸）の御嶽に粟種を持ち来った祖先が粟の神として祭祀され、八重山群島唯一の粟の神として鎮座なされている。

幼くして父を失い、母が実家に去った後は、祖父母に育てられた。程なくして祖父母も後を追って亡くなったので、美佐志の二男スシメの稲福筑殿之に養育され成長し美佐志家に戻り、祖父母の遺命を守り、四、五年の隔年で牛馬を屠り西方支那大陸、粟の渡来地に酒肴を整え祭祀を欠かさなかった。詳しく聴くことが出来なかったが、ウシマ世の中国大陸からミリクをお迎えするというパーリヤの神事は、この故実に由来しているだろうと、子供ながらも聞き覚えていたと、故美佐志加那は話していた。

唐、南蛮焼きの皿小鉢が美佐志家の墓所に破損散乱してあるのを今でも見かける。高さ八寸程の仁王佛が庭前に安置されお茶湯を欠かさなかったが、戦後のどさくさで何時のま

になくなり、床の間に飾ってあった二頭の龍が抱いて眼光鋭く今にも昇天するような南蛮焼きの花瓶があったがこれも行方不明になってしまった。

北岸道路開設の際、干立村に入る道路も拡張された時、粟五穀の神として信仰されたイビが、ブルドーザで押し除けられて所在不明になった。その後、昭和五三年、美佐志家の三姉妹の発願で、新川在の崎枝太郎さんの祈祷努力により発見確認されたが、元の位置に返されぬまま屋敷内の東南側のアカギ（赤木）の根元に安置され、三姉妹だけで祭祀している。

オホホ考

此の節祭行事の中にミリク神のミヤ巡回がある。氏子の婦女子がミリクの眷族として参加し、これに男子の芸人数、パーリヤの舟子の一四、五人が加わる。このミリクは浜辺での豊年祈願のパーリヤ（爬龍船）でウシマ世から粟種を持ち来て各村に広く栽培せしめた祖神を弥勒菩薩の神として迎えられ崇られて干立村に臨場された証であり未来の富貴を展望したものといえよう。ミリクの巡回の途中出て来てこの行列に絡む道化者が「オホホ」で金銀珊瑚の財宝を入れた袋を肩にしている。此の財宝でミリクの眷族の女達の歓心を買おうとして誰彼となく近寄って行き、身振り手振りをして財宝を持っているとの仕草をし己に靡かそうと懸命になるが、言葉が言えず意志が通じぬため「オホホ」とのみ連呼し財宝を叩いて何回となく言い寄って、時たま女子の手を握り引き寄せるが相手にされず無視されてとうとうミリクの行列は去ってゆく。その後ろ姿を呆然とし、啞然として見送る姿勢は哀れで滑稽である。諦めて財宝袋を地におろし今までのもどかしさ、靡かぬ惜しさを振り切るよう可笑しく剽軽に踊りだし満場の人々の爆笑の中に退場する。「オホホ」の面貌は驚鼻で高くとんがり、髭も八の字形で目眉も垂れ下がっていて、どう見ても異人にしか見えない。古老もウランタ人だと言っている。この異人の絡みが長い間疑問で何故異人がミリクの行列に絡むのか。そのいわれはと色々思い悩み、考えあぐねていた。

オホホの由来については、これ以上の伝承がないが、次に示すように一六三〇年頃に、西表島への南蛮船の漂着があり、乗員が上陸したとの記録がある。想像をたくましくすれば、その漂流者が生き残り、島に住み着いて村に同化し、たまたま節祭にあたり好奇心で、ミリクの行列に絡んだのではあるまいか。それが行事に盛り上がりを見せて面白おかしくし、それ以降、行事毎の出番となり、後世に伝えられて現在まで続いてきたものとも考えられる。

干立のりっぱなウランタ墓

一九九〇（平成二）年一月「マラケ」と「ピサッサ」の先祖の焼骨があり、その手伝いに行ったおり両家の墓の中間にすこぶる珍しい墓が見受けられた。聞いたところ「ウランタ」の墓だとの事で造成年代も相当に古くほとんど崩れ落ちている。粟石を切り出し三方を囲い外側より珊瑚礁のカサ石で積み上げ土で被せてある。当時としては特別丁寧に作られた模様だ。私共が知っている遭難で流れついた「ウランタ」人の墓は海辺近くの兼久（砂）地に穴を掘り遺体を埋め、カサ石を乗せただけのお粗末なもので、辛うじて墓だと認められるものだが、この墓は相当の日時および手間隙をかけてあるようでこの異人に対する村人達の愛惜が特別であった事がうかがい知れる。

一六四〇（崇禎一三）年、「王代記」より一〇年前、西表島に南蛮船の漂着があり、八〇名程上陸したと『八重山歴史』に見える。（『異国船漂流記』）

遭難者のウランタ人墓は、浦内のイロチ、宇那利崎のニシコチ、多柄のナーニ等の兼久地に見えた。古老もウランタが遭難して流れ着いた者の墓だと教えてくれた。王府は検視のため役人を派遣したが八重山に到着した処三、四日前出航したとの事で同年中秋に帰府したとの事である。想像を逞しくすればその南蛮船の乗員が病いか負傷で取り残され、村に住みついたのではないか。昔は西洋人を総てウランタピトウ（オランダ人）と言っていたという。

フードウはウランタの言葉ではないか？

フードウと言う木の実がある。果実に比べて種が大きめで中は空洞で甘く美味しく香ばしい。酒に漬ければ風味があつて捨て難い。この言葉は西欧では果物を指すという。この方言は今まで何の疑念もなく方言として子供の頃から馴れ親しんできたが、此処にきて何かしら引懸かるものがある。ひねって考えれば異人が残した言葉でないか。それが方言として残ったのではないかと思われる。

オホホはウランタ人であろう

村に住みついたウランタは当座色々と思惑がありなかなか村人と馴染まずに居た筈だが、年を経るにつれ村人達の暖かい愛情と包容に支えられ溶け込み、至極平穩無事に一生を終えたであろう。私が見たあのウランタ墓はその証しに違いない。言葉が言えぬもどかしさ、意志疎通が計られぬ辛さ、村に溶け込もうとする熱意、おこがましくも財宝を以て婦女子に言い寄る様、その面貌の特異さ、身振り手振りの可笑しさ等を当時の気の利いた知恵のある人が、大黒様にもじってミリクの行列に絡ませ可笑しく面白く仕立てたに違いない。

以上は私の考察である。記録も伝承もないので独断の謗りは免れぬが面貌の特異さ、言葉の通じぬ模様や、財宝を沢山持っている事等を勘案すれば、そうとしか考えられない。

浦内から来た「ダドウリッタ」の芸能

浦内村は昭和七、八年頃、最後の一軒の宜間蒲太が干立村に引越し事実上廃村になる。同村の銅鑼、証鼓各一個村人達が干立村に持ち来ったが、銅鑼は破損、証鼓は有ると思われるが不明である。浦内村では獅子頭がないので「ダドウリッタ」といつて女子の剽軽者が出て口を尖らし目眉をしかめ面貌を可笑しくし、人差し指を伸ばし左右交互に腕を曲げ伸ばしては跳びはね獅子の真似をした。干立村ではこの「ダドウリッタ」を獅子舞に絡めておもしろおかしく演じている。浦内村での専従者は崎枝家の長女崎枝加銘（カマデ）の母ボーヤであった。

旗頭三種

干立村の旗頭は、三つある。それぞれの名前と形や由来などを書いておこう。

一、パッキ

これは、土族専用の旗頭であつたらしく旗には「東」と書かれている。琉球王の二つ巴の紋章を中央に風車を抱き、帯結びのデザインで紋章を左右から抱いている。考案者は不

明である。何時頃旗頭の図案にされ製作されたかわからない。一三九〇年の王府に帰属後か否かも不明である。破損部分を補修し化粧直しをして祭に備える。

二、シシャカシラ（獅子頭）

両刃の槍のデザイン、両刃の先端が下方に垂れぎみ、旗には文字はなく虎を描いてある。士族女子の専用であつたらしく階級制がなくなり平民の子女も加わつたが現在女子はタツチしていない。旗竿に挿入される基部に龍頭の彫刻が上顎、下顎の二枚合わせで抱いている。饒平名家（のひな、アーレ）の婆さんの若かりし頃、祖納上村まで交歓会に赴く時、あの急坂のピサダ道を婆さんが持ち登り参加したと言う。亡くなった婆さんの力持ちが今でも語り継がれている。戦後婆さんから直接聞いた話である。

三、サシマタ（刺叉）

士の兜の前立ての部分のデザイン、中央に赤丸の飾りがつく。これは平民専用で旗頭の竿に挿入される基部の台座に、長短の矢形が交互に指し込まれ安定させるようになっていく。旗には「光永」の後「星立」と書かれている。古くは、士族の「東」に対し多分平民は「西」の文字であつたろうと思われるが不明。「光永」の文字はもともと士族のパツキの旗の文字であつた。

ヤフヌテイの歌詞と和訳

一、キユヌピバ ムトウバシヨ

ソーソー

今日の良い日和を元にし
（囃子、くりかえす）

クガニピバ ニチギシ
スンサミ スンサミ

黄金に比される上々の日に根付けして
（囃子、くりかえす）

二、ミリクユヌ ウニガイヨ

ユガフユ ヌウニガイ

みろく世を願う
ゆがふ世を願う

三、クトウシ チクユル イニアーヨ

シシダマヌ ナリニシ

今年作付けする稲粟は
数珠玉の実のように稔らせて下さい

四、パイヌカジヌ ウスラバヨ

ニシヌ アブシ マクラシ

南の微風が吹いたら
北側の畔を枕にするほど稔らせてください

五、ニシヌ カジヌ ウスラバヨ

パイヌ アブシ マクラシ

北からの押し戻す風には
南側の畔を枕にするほど稔らせて下さい

ヤフヌテイの解説

よき日に節祭の行事を執り行うことの嬉しさを唄い、五穀豊穰の年で海の幸も豊漁でありますようにと祈る。平穏息災の御世を請い受けようとする歌である。

ヤフヌテイの踊り方

この歌は現在の公民館であるオイサーから浜への降り口であるオイサーヌウダチから干立御嶽前にかけて浜辺で旗頭に供奉するアンガマの歌である。婦女子主体であるが、パリーヤの舟子も加わり二列縦隊で旗頭に追随し、長刀に日の丸の小旗を付け持った少年が先頭につく。男女二人ずつの船頭がタナシを着け、片膚抜きで小太鼓を持ち後尾につく。アンガマの女子はスディナ・カカンを着け紫色のナーサチを頭に蝶結びにした女風で、男子は

白のステテコの上衣、白い下衣を着け、カニヤ風呂敷を覆り白鉢巻きをして棒枝の棒を持つ。兜の前立の飾りの部分を真似、厚紙で剥抜き額につけ締めている。兜の前飾りは、おそらく琉球が征討されて薩摩に所属した後に始まったものであろうし、日の丸の小旗を持つ少年はさらに新しい時代に付け加えられたものと思われる。

平民の旗頭を先頭に並列したアンガマはヤフ（權）の柄の基部を右手で握り左手でヤフの柄の頭部を持ち左股の付け根に置き、ヤフの先端を目の高さに保ち足は四〇度程に開いて立つ。法螺の合図でトウチが唄い始める。「キユヌピ」でそのままの姿勢からヤフを左斜め前に右足を左足先に踏み出しヤフも共に出す。「ムトウバシ」でヤフと右足を元の位置に戻し、「ソーソー」で正面に戻したヤフで舟漕ぎの所作を足踏みしながらなす。歌を終えるまで同じ所作で御嶽前に来て弥勒神迎えのパーリヤを待つ。

軍配団扇が出ているが、これも薩摩の琉球征討後に、ミリク神の威儀を示すために採用されたものであろう。昔はたぶんクバの団扇だったのではあるまいか。

フニヌジラバ

舟のジラバ

一、キユヌピーバ ムトウバシ

本日最良の日を基にして

ナイサク ユクユクエロ

（囃子、くりかえす）

二、クガニピーバ シラビヨリ

黄金の日を調べて

三、ミリクユバ タボラリ

豊年万作の世界報をたまわり

四、ウシマユバ マチャウキ

争いのない平和な世の中を待ち受けよう

現在配付されている「フニヌジラバ」

一 キユヌピバ ムトウバシ

ナーイーサークーユーク ユークーエロ

二 クガニピバ シラビヨウリ

ナーイーサークーユーク ユークーヨロ

三 ミリクユバ タボラリ

ナーイーサークーユーク ユークーエロ

四 ウシマユバ マチャウキ

ナーイーサークーユーク ユークーヨロ

フニヌジラバの解説

囃子の、「ナイサク」と「ユクユクエロ」は、意味がよくわからない。伝承の際の誤り、聞き違いではないかとも思われる。まず、「ナイサク」は「ナリサク」であれば、五穀と果物の実のナリが稔るようという意味として理解はできよう。次の「ユクユクエロ」は、「ユクユクヨロ」とも歌われるが、元来は、豊年を祈願するという意味の「ユークイル」あるいは「ユークウル」であったのではないかと想像してみる。大方の解釈、見解をお願いしたい。ご叱責を乞うしだいである。

舟のジラバの所作

神様を迎える舟漕ぎ神事と、そのあとの余興のパーリヤ競漕船の帰投まで、「アンガマ」

の婦女子たちは、両の手を開き、肘を曲げ、腕を肩の高さにし、掌を上に向けて、前方に手首を曲げて招く所作を続ける。両足は交互に軽く膝を上げ下ろしして、二、三步小刻みに踏みながら前進と後退をくりかえす。

狂言「カビラパチカイ（川平早使い）」の台詞と和訳

ハダダー カビラパチカイドサリ、カリユシヌ グユシン マグジヨウンヌ キヤンテ
イカラ クヌンザシャ、ハー ワーガ ウチヌタル ンマ クシンマ ウチヌテイ、ファ
ネーランドー ゴアンドウイナシ カンドウイナシ、グールフチ ガーラフチ、ウチカキ
ウチヌティンジャリ ミリバク ヌンザシャ、ハーティナミンクデイントウララン、シイ
グヒイジュトウラランヤラブザキンカイムチカサニラツテイ、ヤクゲーキチゲードウヤル。
ウンカラヒチムドウシマイヌヒラガミタティテイ、アトウヌヒラウツトウミンガシウシホ
ウガカイホウヤリバハダーダ、カラヤマミチウドウイクイクイシ、マンシイダキトウンヌ
ブティミレー、エーマサンズーヌウフカリユシヤ、チツシャミシヤギウヤドウメーカキテ
イトウクツトウナヤビタン。ナマドウーイシウカイヤーヌメーユシティチャヤル、ユダ
ンシタルシデヤ、ワアガサビラン、クヌンマヌシワザユイアティドウユダンサビタル、ハ
ツトウダーダー。

現在配付されている「カビラハヤチカイ（川平早使い）」

ハアー ダアー ダアー ダアー

カビラハヤチカイドオサリ

カリユシヌ グジヨウグヨウンマウンヌキランティカラ クヌンザシャ

ハア ワアガウチヌツタンマ クシインマウチヌテイ ファーネエランドオゴウ アン

ドウイナシ カンドオイナシ グルフチイガラフチイ

ウチカキウチヌティンジャリバ クヌンザシャ ハアー ヒジユウトウララン シイ

グヤラブザキンケイ ムチカサネラツテイ ウニゲーキチゲードヤル

ウンカラヒキムドウシ マイヌヒラガミタティテイ

クシイヌヒラウツトウミンガシ ウシホウガ カイホウヤリバ

ハアー ダアー ダアー カーラヤマミチ ウレークイクイシ

マンシダキ トウンヌブティミレー

エーマサンジュウヌウフカリユシヤ

チツシャミシヤギ ウヤドウメエカキティトウクツトウナヤビタン

ナマドウグイシ ウーカリヤヌメエ ユシティチャール

ユダンシタルシダイヤ ワアガユダンシヤビラン ンマヌシワザユエアティドウ ユダン
シヤビタル

ハット ダアー ダアー ダアー

カビラパチカイの和訳

ハダーダ川平からの早使の御用馬でございます。無事航海を続けている御用船を発見し
次々合図がありましたので、一刻も早く報告しようと早々と馬に飛び乗りましたが大層慌
てていて装着した鞍が後ろ前になっており、これを正常に戻し直し早速乗馬して駆けまし

たが疳の強い暴れ馬で、手綱捌きどころか制御ができずグールフチガーラフチと持っていかれ到々平素は人も通らぬ屋良部崎まで引きずられてしまい、全くもって気狂い沙汰であります。やっとの事で馬を取り静め向きを変えて尻をひっぱたいて漸く川良山道を登りきり万勢岳まで辿りつき遙か石垣の港を見れば、八重山参着の御用船は既に港に入り安着し碇を下ろしていて、役人使者の衆は美崎在の役人詰め所に投宿安堵している様子、これは一大事大変な不覚である。ホウホウの体で詰め所へ馳せ参じ、「早使御用の者只今参りました。御報告が遅れて申訳御さいません。何しろ疳の強い暴れ馬で制御が出来ず屋良部崎まで持って行かれてしまいました。私めの油断ではなく馬の故ですので御赦ください。

カビラバチカイの解説

王府よりの諸役人使者の乗った船、嘉利吉の船を早期に発見報告しその出迎え応接に遺漏手落ちのないよう次々に火を炊き、平久保から野底頂、川平と合図をなす火の番人がおり川平からは早馬をもって、石垣在役人詰め所まで報告する早使人が常駐していた。

石垣島火の番人早使の口上その仕様が干立の節祭の狂言に何故か組み込まれている。伝承もないので知る由もない。後年にお祭りを面白くするために役人衆が組み込んだであろうか。

狂言「パチカイ」の台詞と和訳

ハダーダ、アガリシラクムヌナカカラトゥンデイタルバチカイドサリ、ハーワガヌテイチャールンマリクユガフヌンマドウスリ、ハーサテイサティクヌンマヌカラジンジャリミリバ、ノウリマイヌマルキンジョルグトルンマドウスリ、ハーサテイサティクヌンマヌチビンジャリミリバ、ノーリマイヌマルキンジョルンマドウスリ、ハーサテイサティマイカキシヨリウミカキシヨリ、ハットウダーダー

現在配付されている「ハヤチカイ（早使い）」

ハアー ダアー ダアー ダアー
アガリシラクムカラ トウンデイタル ハヤチカイドオサリ
ハアー ワアガヌテイチャールン マリクユガフヌンマドオサリ
ハアー サテイサティ クヌンマヌ ナニインジャリミリバ
ノオリマイヌ マルキンジョウルンマドウスリ
ハアー サテイサティ クヌンマヌ チビインジャリミリバ
ノオリマイヌ マルフクルンジョウルンマドウスリ
ハアー マイカキシソウリ ウムカキシソウリ
ハットウ ダアー ダアー パラランパンパン

パチカイの和訳

東の空に棚引く白雲の中から飛び出して来た果報をもたらす弥勒神からの早使の馬であります。偕私が乗ってきたこのお使い馬は唯の馬ではありません。五穀の豊饒は元より山の幸海の幸をもたらし、弥勒世果報を約束する神様のお使いの馬でございます。偕皆々様よくこの馬を吟味してご覧ください。髦（たてがみ）はたわわに稔った稲や粟を束ね括り

つけたように首筋から垂れ下がり、またお臀を見れば良く熟れた稲粟の穂を脱穀し俵詰めにしたよう、丸々としております。今年作付けする五穀は豊作で海も豊漁である事をきつと約束します。神様のお告げですから、夢々疑つてはなりません。

パチカイの解説

弥勒の神が村人の願望を叶えてやるべく、肥えた馬に託して風刺している。豊作豊漁は氏子一同の願望で来夏世を期待している。

狂言「ウシウイキヨングン」の台詞と和訳

ホーへホーへ、タイユウガ タイインヌ アーライーリップカラ、ウミカキルクトウ テイチエウンヌキヤビラサリ。ホー、ヤマトウヌアガリヤマカラトウンデイタルウセーターガウシデイユン、ヤマトウヌアカマリハンジョガウシデイユンバーサテイサテイ クヌウシヌナーニンジャリミリバ、ヤマザキザラムイトウルウシデービル、ハーサテイサテイ

クヌウシカラジンジャリミリバチヌヌターチ、ミンヌターチミイヌターチ、フチヌテイチパイヌユーチキザヌヤーチブウヌテイチムイトールウシデビル、ハサテイサテイ クヌウシヌチヌミリバ、イツチカザリビンヌグトウ、ブーミリバーノーリマイヌグトウムイトールウシデービル、ハーサテイサテイ

クヌウシヌキンデーフンデーセルタナカイ、マイピトウムトウウビリバ イチマンムトウ フタムトウウビリバ ニマンムトウ ミイムトウウビリバ サンヨーシラン、ハーサテイサテイ

クヌターヌ アカマラマイヌ、ミイナリ プーナリクウバ シチハツシヨーナチクターヌマイデービル、クヌターヌマイシ、ミシチクリバミシングシクウワンムリバウワングシク、サキタリバイデイミジハリミジヌグトウル、ターヌマイデービル、クヌサキヌデイメーヌミチカラウデーファイイトウローヤ

現在配付されている「ウシウイキヨングン（牛追い狂言）」

ホウヘエー ホウヘエー ホウヘエー

タイユウガタインヌアライーリップカラ

ウムガキヌクトウテイーチ ウンヌキヤビラサリ

ホウー ヤマトウアガリヤマカラ トウンデイタルウシエー タアガウシデユン

ヤマトウヌアカマリハンジョウガ ウシデユン

ハアー サテイ サテイ クヌウシヌ ナニンジャリミリバ

ヤマザキ ザラザラムイトウル ウシデービル

ハアー サテイ サテイ クヌウシヌ カラジンジャリミリバ

チヌヌタアチ ミヌタアチ アシヌユウチ

キザヌヤアチ ウヌテイチ ムイトウル ウシデービル

ハアー サテイ サテイ クヌウシヌ キリテーフミテーセル タアナカイ

マイピトウムトウウビリバ イチマンムトウ フタムトウウビリバ ニマンムトウ

ミムトウウビリバ サンヨウシラン

ハアー サテイ サテイ クヌタヌマイヌ アカマヤマイヌ
 シチハツシヨウナチク タアヌマイデービル
 クヌタヌマイシミシチクリバ ミシングシク ウワンムリバ ウワングシク
 サキタリリバ イデイミジハリミジヌグトオル タアヌマイデービル
 クヌサキイヌデイ メエヌミチカラ ウデフリトオロウヤ

ウシウイキヨングンの和訳

太平の御世の平穩無事息災を祈願し祝う御座席に吉い報を一つ申し上げましょう。偕大和の東方の山から不意に飛び出した牛は誰の何という牛でありましょうか。これは大和の赤毛の牛で繁殖の多いすばらしい牛で御座います。首筋をよくみれば毛が荒くザラザラしており頭には二本の角があり、耳が二つに目が二つ口が一つあり、また下肢を見れば脚が四つで一肢に蹄が四つづつあり尻尾が一つある牛でございます。この牛の角は神に供える一對の飾瓶のように見事に揃い、尾をみれば稔りの稲粟束を括り下げたようにある。この牛で踏み碎いた田圃に稲苗一本植えれば一万本に、二本植えれば二万本に三本ではそれこそ勘定出来ない程に分けつ増殖します。この田圃に植えた稲が実になり穂になつてくれば三〇束で七、八升も搗くことが出来る。収穫の多い田の稲であります。この田から取れる稲でお神酒にすれば神酒が仰山にとれご飯にしてお握りにすればお鉢に城のように盛り上げられ、お酒にすれば泉が湧き出るよう涸れることがありません。この恵まれたお米で造ったお酒を鰯腹呑んで胸を張り、腕を振って大威張りして村の大通りを自慢して通ろう。

ウシウイキヨングンの解説

方言で稲をマイと言ひ田植えをマイウビ、タウビと言っている。

片手で握れる程の稲苗束ねて束（タバ）とし、三束（ミータバ）合わせて一束（チカ）とし一束（チカ）を一〇束合わせて一抱え（マルシ）とする。一マルシは三〇束である。

節アンガア「キユヌフクラシャ」の歌詞と和訳

一、キユヌフクラシャヤ	今日の嬉しくも喜ばしい事は
ナウニジャナタテイル	何に例えよう
チブテイウルハナヌ	脹んで一雨の潤いを待つ花の蕾が
チユイチャタグトウ	よい按梅に朝露を行きあったように嬉しい
ヨホンナ	（囃子）
二、クヌトウヌチヌミヤヤ	この御嶽の庭、広場は
ウヤグミサアアリドゥ	神々様が集う所で大層恐れ多いけれど
シチグトウヤクトウドウ	節祭と言う欠かす事の出来ぬ行事なので
ユルシタボリ	お庭を踏み荒らしますがお赦し下さい
三、シチグトウナリバヤ	節祭の行事ともなれば
スリドゥフシャムヌデイ	揃いの衣装がほしく
カンヌトウシナリバ	結願ともなれば神様へのお供物の準備で
ブナリフシヤル	姉妹がいてくれればと思う

（男手ではどうしようもありません）

- 四、ブナリフシヤムヌヤ
 ナウドウフシヤムヌガ
 タブサバギフシ
 ウリドゥフシヤル
 姉妹の欲しい物は
 何だろう
 人並みに身嗜みをするための櫛
 それこそが欲しい
- 五、ビキリヤフシヤムヌヤ
 ナウドウフシヤムヌガ
 バギザシカタナドゥ
 ウリドゥフシヤル
 男兄弟の欲しい物
 何だろう
 脇差と太刀と
 それこそが欲しい

(この日だけでも武士と同格になって見たい)

現在配付されている「キユヌフクラシャ」

- 一 キユヌフクラシャ ナウニジャナタテイル
 チブテイウルハナヌ チユチャタグトウ ヨーホンナ
- 二 クヌトウヌチユミアヤ ウヤグミサラリドゥ
 シチグトウナリバヤ ユルシタボリ ヨーホンナ
- 三 シチグトウナリバヤ スリドゥフシヤムヌデイ
 カンヌトウシナリバ ブナリフシヤル ヨーホンナ
- 四 ブナリフシヤムヌヤ ナウドゥフシヤムヌガ
 タブサバキクシドゥウリドゥフシヤル ヨーホンナ
- 五 ビキイリヤフシヤムヌヤ ナウドゥフシヤムヌガ
 バキザシカタナドゥ ウリドゥフシヤル ヨーホンナ

節アンガア「キユヌフクラシャ」の解説

節祭は百姓にとって誰にも遠慮、気兼ねも製肘も受けぬ天下御免の祭日である。階級制の厳しい封建時代の圧政に喘ぐ哀れなブザ達の嘘らざる本音を初にうたいあげ、大きく背伸びし吐息して束の間の息抜きをする様子が伺え側隠の情を禁じ得ない。百姓なるが故の蔑視、差別、切捨て御免の生命の軽視、過重な貢租負担の人頭税、しかも明治三六年に廃止されるまでの二六六年間気の遠くなるような年月、泣いてもなきぎれるものではない。

節アンガア「グサクテイ」の歌詞と和訳

- 一、グサクテイヌグイ ヨホンナ
 ナカウスミテイ ヒヨンナ
 ユミヤハチマン
 ナカウスミテイ
 五尺手拭い ヨホンナ (囃子)
 中を染めて ヒヨンナ (囃子)
- 二、シカクハシラ ヨホンナ
 ワドゥニヌシテイ ヒヨンナ
 ユミヤハチマン
 ワドゥニヌシテイ
 弓矢八幡
 中を染めて
 四角柱
 我が胴によせて
- 三、ヤドゥヌナビク ヨホンナ
 ワリガユシシテイ ヒヨンナ
 ユミヤハチマン
 ワドゥニヌシテイ
 弓矢八幡
 我が胴によせて
 戸をひく
 私がよせて

ユミヤハチマン

弓矢八幡

ワリガユシテイ

私がよせて

四、ウキヌトウナカ ヨホンナ

沖の海の中

サユワタテイテイ ヒヨンナ

波をけたてて

ユミヤハチマン

弓矢八幡

サユワタテイテイ

波をけたてて

五、ノボリクダリ ヨホンナ

上り下り

フニヤウマチ ヒヨンナ

舟を待ち

ユミヤハチマン

弓矢八幡

フニヤウマチ

舟を待ち

現在配付されている「グシャクテイ」

一 グシャクテイヌグイ ヨーホンナ ナカウ スミテイ ヒーヨンナ

ユミヤハチマン ナカウ スミテイ

二 シカクハシラ ヨーホンナ ワドウニ ヌシテイ ヒーヨンナ

ユミヤハチマン ワドウニ ヌシテイ

三 ヤドウヌナビク ヨーホンナ ワリガ ヌシテイ ヒーヨンナ

ユミヤハチマン ワリガ ヌシテイ

四 オキヌトウナカ ヨーホンナ サユワ タテイテイ ヒーヨンナ

ユミヤハチマン サユワ タテイテイ

五 ノボリクダリ ヨーホンナ フニヤウマチ ヒーヨンナ

ユミヤハチマン フニヤウマチ

グサクテイの意識

一、五尺手拭いを思わせる吹き流しの旗は真ん中を染め貿易船の目印にし湾口近くに立ておく。

二、引き戸は我が体に強くピッタリ引き付けて軋まぬよう、家の者に判らぬようそっと開ける。

三、引き戸を開けるのは忍ぶ恋人合図があつて開けるが、やっぱり少しは軋むようだ。

四、沖合遠くゆく帆船は帆に一杯風を孕ませ、舳先で波を蹴立て泡立てて走る。丁度湯が沸騰し泡立つようだ。

五、波に乗り降りして走る船は、八幡大菩薩の御加護があるので大丈夫、安心してよろしい。

節アンガア「グサクテイ」の解説

この歌は錦芳氏慶来慶田城の南蛮貿易船の目印、吹き流しの旗と思われ娘の合意の上の失踪の際の挙動を唱い、親元からの追跡を怖れながらも恙なく出航にこぎつけた安堵感、万帆に風を受け波を蹴立てて走る様を唄ったものであろう。

大昔は祖納村を親村とし役所もあり、他の村々は親村の方針に従う慣例であった。多分慶田城一統の影響はまぬがれず、この歌が干立村に組み込まれたものであろう。一六四一

年大和在番が駐在し始めた事もあって、弓矢八幡、御座るはそれを物語っている。伝承も記録もないがそうとしか考えられない。

これは、故石垣長有さんが解説されたものである。

節アンガア「グコパ」の歌詞と和訳

一、グコパヒヨナ イサーヤリコヌ

鶏の羽根は (囃子)

グゴヌ キラマチ

鶏の頭髮は

フトウキミセマセ

たまには解いて洗ってごらん

タンタン

(囃子)

二、グゴヌ ヒヨナ イサーヤリコヌ

鶏の (囃子)

グゴヌカラジハ イナカカラジ

鶏の頭の毛は田舎の髪型だ

カニユムタンスーリ、カウカウトウ

鳥がカウカウと笑っている

タンタン

(囃子)

三、ハナヌ ヒヨナ イサーヤリコヌ

花の (囃子)

ハナヌ ユイナル サトウキム スラス

花のゆえに男の気を晴れ晴れしくする

イランヤシヌ スーリ ワガキム スラス

物の解らん奴が我が心をくしゃくしゃにする

タンタン

(囃子)

四、ナガイ ヒヨナ イサーヤリコヌ

長い (囃子)

ナガイカタナオ サシウキゴザル

長い刀を差し置いています

ウシルサヤニテ マイヌアガル

後を鞘にして前が上がる

タンタン

(囃子)

グゴパの意識

一、ブザ土百姓の頭髮は鳥の巢のようで梳った事がないと見え、グジャグジャして不潔で見栄えがしない。たまには頭髮をといて洗い清潔にして櫛で梳くがよい。少しは見栄えがし不快感も与えぬ筈だ。

二、百姓の頭髮はやっぱり田舎者の髪型だ。不潔で汗臭い。身だしなみが悪いのは仕方ないとしても汗臭く悪感情を他人に与え、鳥がカウカウと笑う。

三、容貌を鼻にかける女性が多い、男がチャホヤするので余計自惚れ天狗になり鼻持ちならない。彼女もそんなであってほしくない。軽薄な男に騙されはしないかと心配である。

四、土百姓のくせに武士の真似をし大刀を差しているが馴染まない。刀の鞘が垂れ下がり柄頭が直立して天に向い、全くもって風情がない事おびただしい笑止千万だ。

節アンガア「グコパ」の解説(石垣長有さんによる)

武士を真似、太刀を差したブザを嘲笑したもので、その風体を鶏、田舎者になぞらえ櫛目の入らぬ頭髮を不潔がり鳥に託して笑っている。階級を離れ解放感に浸りたい心情は諒とするも哀れである。刀を差し武士を真似た処でお里が割れ可笑しさを通り越し惨めである。

グコパの解釈は難しく、人それぞれであるが「グゴ」を方言の「ググ」つまり鶏と解し

「パ」を羽根と解して今に至っている。「グゴパーヒヨナイサーヤ」とここでも余計な言葉「イ」が挿入されている。「ナー」と伸ばし「サ」と続けるべきである。

節アンガア「フニヌク」の歌詞と和訳

- | | | |
|----|-----------|---------------|
| 一、 | フネ ヒーヨナ | 船は |
| | カシヌキドウスリ | 櫓の木を |
| | フネデゴザル | 船材にして造りました |
| | サーヌサヌイヒヨイ | はやし（以下同じ） |
| 二、 | パラ ヒーヨナ | 帆柱は |
| | シンギマチスリ | 杉か松の木の若木直材の |
| | パラデゴザル | 柱でございます |
| 三、 | シベ ヒーヨナ | 滑車は |
| | コバナキドウスリ | 堅いシマトネリコの木 |
| | シベデゴザル | の滑車でございます |
| 四、 | ミナ ヒーヨナ | 美縄、引く手綱は |
| | アサヌブドウスリ | 麻、チヨマでなつた |
| | ミナデゴザル | 美縄でございます |
| 五、 | ヤポ ヒーヨナ | 帆は |
| | サラヌビドウスリ | 三角藺又はガマの葉っぱ |
| | ヤポデゴザル | の帆でございます |
| 六、 | トゥレ ヒーヨナ | 鶏が |
| | ウタイシヨラバスリ | 啼き刻を告げた |
| | ユルワユナカ | 夜半だが出航の時潮刻である |
| 七、 | フネ ヒーヨナ | 船を |
| | イダシヨラバスリ | 出すなら |
| | ユイダシワリ | 夜半が良い。 |

節アンガア「フニヌク」の解説

貢納船の材は西表島は全島が山で木の種類も多く材質も良好で、深山には高い大木も多いから、スラ所（造船所）が古見村につくられ後に船浦に移った。三反帆の舟は千立でも造り、ウナザシの耕作地への地船だったらしい。苧、麻で美綱を三角藺や蒲（スイ）で帆をつくり帆柱に杉松と唄っている。杉の木はアラシク寄りの前大屋の田圃の畔際に一本生えていた。自然木か他島から取り寄せ植栽したものか不明だが、今はない。タカラ浜ジイリヤ洞窟の天井で削り取った箇所がある。帆柱の先端に当たりさしさわる部分が削られ先人の手垢が今に残っている。

最後の句の夜舟を出せというのは、潮刻も都合よい。妻女の涙顔は見るのも辛いという意味であろう。

ミリクの臨場とミヤ巡回

ウシマ世、西方中国大陸から粟種を持ち来て食生活に潤いを与えて下さった神を、ミリ

ク菩薩として招請し臨場した証として、大勢の眷族を引き連れ軍配団扇で前に扇ぎ時折、後ろに続く眷族を招きながら巡回する。長刀に日の丸の小旗をつけ持った少年がミリクの両側につき従い袖を持って供奉する。眷族がこれに続き小太鼓、笛、銅鑼で音頭をとりミリクの歌で広場に出回る。眷族の服装はヤフヌテイで記した通り。
ウシマとは、大きい島、つまり大陸の事である。粟の種子をもたらし大陸からの潤いある暮しがウシマ世である。

ミリク節の歌詞と和訳

一、ダイグクヌ ミリク

バガシマニ イモリ

大黒様の弥勒様

わが島にいらっしゃって

クトウシカラ バガシマ

今年からわが島は

ミリクデムヌ ミリクデムヌ

豊年満作である

ササユヤサ スリササ

(囃子 二句以下もくりかえし)

二、クトウシユヤ ミリク

今年は豊年豊漁がきつと訪れる

ヤイヌユヤ ユガフ ミイティヌユヤ

来年は世果報の世で再来年は

メヒンマサラシタボリ マサラシタボリ

一層の果報をお恵み下さい

三、ウシカチヌ クガニ

白ごとの黄金は

ミリクユヌウカギ

弥勒の世のおかげ

ウシカジン タントウ

白ごにたくさんのお米を搗かせて下

さい

四、ミリクユン イモリ

弥勒世のおかげで

ユガフユヌ ウカギ

世果報の世のおかげで

ギレムヌ ブナジン スルユティ

すぐれた若者たちも女頭たちも村人そろつ

て

ブドウリアシバ ブドウリアシバ

踊り遊ぼう踊り遊ぼう

ミリク節の意訳

一、大黒様も弥勒菩薩もこの干立村に迎えられ、鎮座されたので、作付けする五穀を始め他の作物も万作豊漁が約束され果報の村となる。

二、今年は豊年豊漁がきつと訪れる。来年はより一層の果報に恵まれ、再来年はより一層の世果報をお恵み下さい。

三、各戸の搗臼毎に入れてあるお米は、大黒弥勒様の陰徳の賜である。これから沢山の黄金の稲粟を白で搗いて裕福にして下さい。

四、大黒弥勒様のお陰で干立村は作物も豊作で海の幸も多かった。神様にもお礼の祭りをしよう、皆で感謝し喜び踊り明かそう。諸役の人もブナジ（女頭）も揃ってお祝いしよう。

ミリク節の解説

「サーサユヤサリサーサ」の囃子を干立村ではこのように唄っている。喜舎場永・先生は三、三、五、八と解説され定説となっているが、各村々の唄い方があるとの意見もある。

りその意見のままにした。

ギレムヌは、優れ者を指す言葉であり、ブナジは女頭役、今で言えば婦人会長である。

神司のトゥリムトゥ送り

神司は祈願座をたち鳥居の所まで退きイビへ向い、団扇で招き「ニガヤカラカイリヨラ、チカヤカラムドウリヨラ、バガヤドウニムドウリ、ブドウリアシバ」とミリク節を唱い、神様へ暇を告げる。旗頭サシマタの先導でササラニシの道を唄い旗頭を上下に踊らしながら道行し戸根元まで送る。

ササラニシの歌詞と和訳

- 一、ササラニシカジヤ ハリ
ナミヌハナ スラス
波の花をたてる
- 二、ワンゾ ミヤラビヌハリ
サトウガ キムスラス
我が思う乙女は
男の恋心を晴れ晴れしくする
- 三、ウブトウタチュル ナミヤハリ
ピダウチドゥ ムドウル
大海にたつ波は
岸边に打ってはもどる
- 四、ミチニタチュル ンゾヨハリ
テイトウリ ムドウル
道に立って待ちわびる妻女は
帰った夫に安堵して手をとってもどる
- 五、タイラトウドウルシヌ ハリウヒリ
ウリニタユル
汀良町轟の近辺に立つ神様
それを頼りに祈願する
数多くの人々の
ウマンチュヌ ハリマギリ
チムヌ ユタシャンド
心の豊かさよ
- 六、インカクジヌ ウスバニハリ
タチデイワル ウンプトウキハリ
円覚寺の側に
立つておられる仏様
ワンゾ ユクシデイヌハリ
わが思う人が心がりしたら
アラバ ウドーシテイ タボラナヨ
それを教えさとしてください

ササラニシの意訳

- 一、さらさらと初秋の北風は長閑にそよぎ、岸边に寄せる波も穏やかである。
- 二、吾が意中の乙女の笑顔は何より勝って我が心を和ませ妄念を払い疲れも吹き飛ばしてくれる。
- 三、沖合遠くから寄せ来る波は岸边まで寄せて返す。その波のように悪罵嘲笑も右の耳より左の耳へ抜けさせれば怨念も残らず平常心を保つ事ができる。
- 四、道角に停ち安否を気遣い待ち侘びる妻女は無事な夫の姿を見て、安堵して手を取り合って家に帰る。
- 五、汀良町の轟の近辺に祭祀されておられる神様、それに万幅の信頼を寄せ祈願する大勢の人々、その心根は美しく且つ豊かである。
- 六、円覚寺の楼門に立っておられる仁王仏様よ、固く約束し誓いあった乙女が邪な心で若し、私を裏切るようなことがあったならそれはいけない事だと教え諭して下さい。

ササラニシの解説

意中の女を岸边に寄せて返す穏やかな波に託し、その笑顔は何より我が心の安堵、と歌いあげる。心変わりしないように、もし変節があれば仁王様よ、それはいけない事だと教え諭して下さいと、その心根はまことにいじらしい。貢納船乗り込みは、選ばれた誇りと残す女の心を計りかねている。しかし、やはり女は弱く、シパヨヒユングドウにある通り、筑佐事の権威に負けとうとう賄女にさせられている。往時のブザ（平民）の生活の暗さが目に浮かび言葉もない。

水元の神への感謝

節祭の二日目にトゥズミ（止留）の行事を行なう。その翌日（三日目）は各戸の井戸を浚えて水元の神への祭祀を怠らなかつた。昭和三二年に簡易水道が完成し道路の四辻毎に水道栓のポストが設置されるようになった。それからは、各戸の井戸は無用になり、水元の神への祭祀も廃止されている。

干立地内に村立して以来長年にわたり生活用水として生活を支え使用されてきたウイヌカー、アダヌカーの両塞井戸の水元の神への報恩、感謝のためにシーシヤカシラ（獅子頭）とよぶ、旗頭を立て、道路の草を払い、両井戸を浚えて清浄にし、棒芸を一、二点奉納している。なお、スリズ（昔の村の集会場）への帰途、旗頭を先頭に各家を訪れて、迷い込んだ悪霊亡者をドラや太鼓で屋敷内から追い出し、清めをして行事は終了する。

第三部 語り継ぐふるさとの歴史

多柄村を建てた有若氏の歩み

多柄村は、現在の浦内川河口の左岸、方言でカシピダという岸の西側のナメラ台地にあったとのことである。この村は、有若氏の大宗泰基が村立てしたと伝えられるが、村立ての年代も不祥、記録もない。喜舎場永珣先生の『八重山歴史』では、有若氏は泰基を祖とし三代の泰全まで記載され、一四代寛智以下はない。寛智が早世したので弟の寛次が一五代を継ぐ事になる。姓は登野城である。有若氏は名の始めは「泰」の字をもちいてきたが、尚泰王の泰の字であることから遠慮して一八五七（安政四）年に泰の名字を寛に改める。（大浜正演さんの話）

一五代寛次は日露戦役に従軍した。除隊後満州に止まり馬賊の頭梁になり、相当勢威を振るい生地の西表までその名が知られていた。本土の女性と結婚、大正の三、四年頃に一時帰郷して、財産を処分し祖先の位牌を桃林寺に預け台湾へ渡ったが、その後の消息は不明である。後にしるすように帰省当時の面白い小咄が残っている。浦内村にはその生家が昭和三、四年頃まで残っていたが、大きなヌキヤ（貫屋。掘建て式でなく、礎石の上に建てる家）であった。

一四代寛智は浦内村の平民宜間クヤマを娶った。階級制の名残りで婚姻届けが出来ず、届け出のないまま長男蒲太（カマタ）、次男三太が生まれた。ところが、寛智が早死したため、子の入籍はどうとう出来ずじまいで、母の宜間姓を名乗る。その子の正喜と正二郎兄弟は、現在宜間姓であるが、有若氏直系の第一六代の子孫である。（登野城寛次の実妹の故登野城ナベマさんの話）

多柄村を建てたと伝承される有若氏の泰基と祖納村の大竹祖納堂儀佐は、ほぼ同年代の人であろう。二人とも錦芳氏初代の慶来慶田城用緒より先の人物ではないかと考えられる。

多柄村は一六四〇年ごろの「両先島絵図帳」にすでに登場する古い村である。ある書物には、西表島には姑禰村（現在の古見村）、多柄村、祖納村が在ったと書かれていたが、相当地に古い村だと認識している。

勲章を抵当にお金を借りた人の小咄

有若氏登野城寛次さんは日露戦役に従軍、金鷄勲章を拝受していた。大正初年頃帰省して財産を整理処分し台湾へ行く途中勲章を「バンガウジ」という渾名の人物に示し、「この勲章を持って居れば公の席では他の人を押さえて最上席に座りその待遇が得られる証しの物で、自分の命の次に大事な物である。台湾へ行き帰って来るまでこれを抵当に拾円程融通してくれ」と頼み込んだ。「帰島後は直ちに勲章と引き換えに借りたお金を支払う。台湾には兵隊当時の戦友や友人が手広く事業をやっているので心配はいらない。」と言葉巧みに持ちかけ拾円をせしめて渡台しそのまま行方知れずになり「バンガウジ」は大損をしたと言う（小底ブナリさんの話）。

大津波以前の浦内川の流れ

浦内川の河口にそびえている大、小二つの岩石の小島をアトウクという。昔、アトウクは現在のような離れ島ではなく、河口南岸のカシピダの岸に続いていたと伝えられている。

浦内河口の北側の細く伸びた砂地（兼久地、方言ではカノー）の端をイブの先というが、ここは、アトウクの東側のパナヌリの岸に連なっていた。つまり、現在の浦内川の河口は締め切られていて、河口からカトウラ地区にかけての一带は潟湖（方言でカタバル）になっていた。一七七一年（乾隆三十六）年、いわゆる明和の大津波までの浦内川は、名前をウラダ（浦田）川と称していた。クモツタ、蒲（方言ではスイ、和名オオシンジュガヤ）の生えた湿地帯、フカンタ、アマダウチ、マラントウを経て、今の与那田川に出ており、支流はサキヤン、アバナリヤ、ウセキ川を通じてタカラの浜に流れ出ていて、金座山、アラシクの丘は二つの川に挟まれた離れ島になっていたという。

一七七一年（乾隆三六）年の明和の大津波はタカラの兼久地を乗り越え、浦田川支流を土砂で埋め尽くして本流に合して一体となり、カトウラ慢湖を満杯にして浦内イブの端を突破し現在の浦内川河口をつくる。これ以後、浦田川は、浦内村の名を冠され浦内川と名称を変え現在に到っているといわれる。

アトウク島のこと

また、干立村の祖先がナメラという場所に住んでいた時代の御嶽は大アトウクにあったという。（故大浜正良さんの話として小底宜佐の故の小底ブナリさんに聞いた）その証は、ウマタより山越してナメラ浜に至るカシピダ山の鞍部に深い洞窟があり、その洞窟に風葬とみられる人骨がたくさんあるのを昭和二四、五年ごろ平得泰次さんと東江（現在は宮里）さんの二人が探査した結果として話してくれた。

アトウクの探査は故石垣長有さんが昭和二三、二四年頃おこない、伝承の通りであることを確認したと話しておられた。それによると、大アトウクの頂上の窪地に、サンゴ礁で積み上げられた墓所が確認され、有若氏初代泰基の墓所と思われるものが現存するという。昔からアトウクは神高いところと言われ、覗き見ることさえ禁じられていたが、カシピダの崖に続いていた場所が明和の大津波によって土砂が崩壊し、河口になり、独立した切り立った岩壁になっていたため昔は登ることができなかったのである。現在でも登ることはなかなか難しいが、雑木が生い茂るようになり、切り立った側面にも木が生えており、木を伝って頂上まで登ることができるようになった。戦後海賊キッドの財宝を求めて頂上をきわめた石垣長有さんの発見である。

また、多柄のジイリヤ洞より北側一帯スバの所をナンダディと呼んでいる。ナンダディとは波立の意味で、一七七一年の明和の大津波の時に寄せて来た波が同地にぶち当たり、返した所からこのように呼称される様になったと伝えられる。

多柄村の移転

ナメラ台地に住みついていた多柄村の人達は、この場所が冬期の北風を真正面に受け、粟、黍などの作物への被害が大きいため一部は浦内村へ移転した。残りの大多数の人々はナンダディの台地や浦内川の支流の河口のタカラの兼久地（カニクジ、砂の堆積地）の平地に移った。そして御嶽をアトウクよりスバアの岬へ移して居つくが、ナンダディは、方言でパイタカと呼んでいる脚高蟻が多く、寝せ付けてある赤ん坊にたかり喰いつく等の害があつて、子育てが出来なかった。一七三四（雍正一二）年に過半数がウナザシに移り村建てをする。それを裏付ける史料としては、移転三年後の一七三七（乾隆二二）年の『参遣

状』の中の「村屋調」に多数の多柄村人が祖納村から一里九町三六間（五千三七メートル）、浦内村から五町五四間（六三七メートル）の所に村建てしたとある。おそらく距離的にみて、現在の住吉村のあるスギバン、ナバンガー（川）の台地周辺であろう。子供の時分、父に連れられて炭坑の坑木切り出しに行ったおり、石垣囲いの住居跡地と思われる個所に陶器やガラスの破片等が散乱しているのを見ている。ウナザシ御嶽も、今でも香炉が見受けられ、拝所の跡が確認されている。

スバアとタカラの台地やタカラの兼久地に残った人々は、多柄、干立と二つの村に別れたらしい。一七三八（乾隆三）年の『洪武の始めよりの王代記』にある「ウカリ、不シタテ、タカラ、ソナイ」とある村名はタカラ時代で、ウナザシへ過半数が移住する以前の事と思われる。しかし、ここタカラ地区は方言でマヤチコーというミミズクの類が多く、夜毎啼き叫ぶ声が気味悪く、且つマラリアの風土病に痛め付けられ人の心は萎縮してしまう。ミミズクの大群が崎山半島南西側のウツムリにあったピサドゥ（平戸）村を襲い村人を大半死に追いやり、ピサドゥ村はそれで廃絶の憂き目になったとの伝説もあり恐れおののいていた。宮良孫勇さんの父君の宮良孫副さんの話である。

適地を求めて転々と移動をくりかえす

一七三八（乾隆三）年、多柄村の残余のうち、七〇人ほどは、ウナリ崎のニシミジ（三軒屋と俗称する）、フサキ（富崎）野に移り、小村を立てた。ところがここは水利に乏しく、日照りが少しでも続けば蠅が飛ぶという乾田で、人力のみでは耕作に難渋した。当時の在来稲は長稈のため倒伏して未熟米が多く減収し貢租の上納にもこと欠くうえ、飲料水は富崎岳の麓まで往復せねばならず、住民は疲労困憊していた。そこで飲み水の水利を考え、船浦湾に注ぐマーレー川の左岸に移動、ピナイ滝の名を採りピナイ村と称した。ナゾラ、マーレ、ピナイ、ニシダ（西田）の川があり、水利には恵まれたものの、反面多湿で蚊蚊が多く風土病のマラリアにも祟られて移動を余儀なくされ、船浦崎のアシザイシ（足駄石）の所の平地に移り、小村を立てる。この移動年月は不明で、伝承のみが残っている。（故小底ブナリさんの話）

一七三八年多柄村を離れ、一七六八年上原村建てに合流するまでのおよそ四十年間、ニシミジ（三軒屋）、マーレー川左岸地区、船浦のアシザイシの平地と放浪し移動を重ねる事になり哀れとも何とも言えるべき言葉もない。自主的の移動の形態をとってはいるが、実体は貢租のための強制移住であった。ここにも琉球王朝役人の横暴と政治の貧困が見られ忿懣やるかたない。マーレー川左岸の村跡のことはブルドーザーを持って農地整理に当たった故石垣長有さんが話してくれた。

チョンギ（支那将棋）

年代にすると黒島英輝さんより五、六代前の人で、マラケ（黒島家）の先祖に、唐と呼ばれた中国での通訳として活躍した人があった。たまたま貢納に上府帰島中暴風にあい、福建にたどりつき滞在中、唐人のチョンギを指すのを側にいて見覚えた。或る日、いつものように見学中、思わず「駄目だ」と口走った。囲碁将棋は岡目八目とかいつて側で見ておればよく解るらしい。これを聞き付けた唐人の指手は怒って無理に駒を握らせ指し始めた。最初の程は毎って片手の駒を落として指したが、案に相違し手強く忽ち負けてしまい、

二度三度と指し重ねたが勝つことがとうとうできなかったという。唐人は黒島の技量に感伏し将棋盤に駒を添えて件の黒島に贈ったという。

黒島の先祖はその将棋盤や駒を持ち帰り、王府の役人等に駒の進め方を教えたという。以後琉球に支那将棋が広く伝わったとのことである。駒は黒木（リュウキュウコクタン）ジン木等の固い木でできており、直径三、四センチ厚みが一、二センチ程であった。このことは故黒島英輝さんに聞いた。

昭和の一二、三年頃まで、故新城寛忠さんが主導し、那根弘さんや今は亡い古見用規さん、祖納用美さん達と指していた。

駒は、 王、士、象、馬、車、包（黒木）、
師、仕、像、馬、俥、砲（ジン木）

と刻されていて棋盤は折り畳み式であった。今はそれを指す人も駒や棋盤も見なくなつた。

ウナリ崎の昔話

多柄村より浦内村へ移った前田原家の男は、働き者で人々から大変褒められ、その者の作物に限って鳥獣の害もなく、毎年豊作で裕福に暮らし、人情も厚く、乏しい人達には食糧を分け与え村人に敬慕される福德円満の者で、その妻女もなかなかの美人で夫に劣らぬゆかしい心の持ち主であった。

同村の内間という男は、犬を飼って狩りをするのが生業で、しかも男前が良く、口も手も八丁という隅におけない男の口車にのった前田原の妻女は、その男とわりない仲になった。しかしグータラで働きがなく、口先で人を騙し物をかすめ取る甲斐性のなさ、ふしだらさに嫌気が差し始めた件の妻女は、何とかして別れようと画策する。これを知った内間は自分の働きのなさやグータラを棚に上げて前田原を憎み、一夜その家に忍び入り寝込みを襲い胸を突き刺し、瀕死の状態にした。村中大騒動で善後策を話し合ったが如何することもできぬうち死期を知った前田原は、自分が死ねば遺体をウナリ崎端に近く埋め、クバの木を植えるよう頼み、女の浅はかさと男の非情を恨み四つ足の獣と、婦女子はウナリ崎を廻航させぬと、恨み死にしたという。以後、同ウナリ崎は四つ足の獣と、婦女子は石垣旅には浦内村に必ず下り、ニシミジ（三軒屋）まで陸行し、そこから乗船して旅を続けたという。

もしそれを無視して廻航すれば忽ち風波が立ち舟を覆し、或いは、帆柱を折り航行できなくなつたという。昭和四、五年頃までは刳舟であったので、旅をする者は固く右の遺言を守ってきたという。（大浜正演さんの話）

大津波後のイミシク高台への移住

一七七一年明和の津波をナーニ、浦内川の支流の河口のタカラで迎えた多柄村、干立村の生き残りの人々は津波の再来を恐れ、ピサドゥ村がミミズクによって滅んだ昔話を思い出しイミシク、ナーニの高台へ移り住んだ。河口が変わった浦田川の西に流れる支流は、与那田川と名称を替えた。昔の本流は、アマダウチ、マラントウ、チクララ地帯の僅少な

水源となった。与那田川は風波による土砂の堆積が始まり、マヤバタラの兼久地を形成、雑木、雑草が生い茂る場所となる。しかし、貢布の乾かし晒しには是非なくイミシクの高台から与那田川迄の往還を余儀なくされ、作物の収納には高台への担ぎ上げに難渋し、稲の収穫時に南風の吹き荒れる場合には稲束を濡らしてしまうこともたびたびだった。濡れた稲を乾かす二重の手間と時間の無駄を考え、現在の干立地区内への移住が始まった。干立人の宇保の兄弟が移住の先鞭をつけ、全員が後を追って移り終える。これは、大津波後の事だとの口伝えのみで記録もない。

一七七八年、与那覇在番が大津波後の八重山復興に尽くされた頃はイミシク高台地にてその恩恵を受け、二、三〇年後の一八一四年頃には干立地内に移住を終え、多柄御嶽もスバアより金座山西麓に遷座祭祀したことだろうと考えられる。

世の神の元御嶽（多柄御嶽）

元の御嶽は多柄、不したて（干立）両村建ての有若氏大宗初代がナメラ台地に村建ての際、守護神として招請し大アトウクに鎮座させ祈願し、多柄の波立ての台地に移動したときスバアの岬に遷座せしめた御嶽であるが、多柄不したてと両村に分離し、上原村建てに有若氏を始め大多数の多柄村人達が宇那利先のスギバンの地にまず移動、残余の人々が干立人と共に明和の津波の洗礼を受け、イミシク高台、さらに現在地に移った時に金座山の西山麓の現在地に再度遷座せしめたという歴史をもつ、多柄村建て以来の御嶽で最も古く由緒あるものである。イビ名神名ワタリ神トウリ神として一七一三（康熙五）年の『琉球国由来記』各村の御嶽名簿に掲載されている。

上原村建ての際、有若氏直系の一四代寛智の時、多柄村の人々をひきつれて上原村の建設に参加したが、上原村の廃村にともなう浦内村に移動した。上原村にある多柄御嶽の香炉は、南南西、卯辰の方角の多柄村の跡に向いている。

干立御嶽

神名トウリチキトビカイ（元御嶽への「取次ぎと控え」の意味であろうか。）

この御嶽は、イミシクより現在地に最初に住み付いた宇保家の兄弟が、ウーニファが貢納船発着の潮刻の関係で、多柄御嶽への遙拝所として拝詭した個所跡に、個人の拝所として建立したのが始まりで、比較的に新しいと思われる。おそらく一七七八年前後であろう。それまでは多柄御嶽で村の総ての行事は取り行われてきたが、この個人の御嶽がブザ（平民）の性格を帯びた御嶽になり、それ以後、多柄御嶽は元の御嶽と称され、土族の多柄人が拝跪し、下の干立御嶽には干立人が拝跪するようになった。豊年祭、節祭の両祭は平民主体の祭事なので自然と干立御嶽で執り行われることになったと思われる。

井戸の変遷

一六九四年には石垣地方では掘抜井戸が穿ち始められるが、西表島の場合は全島が山々に覆われていて、干立村も金座山の山麓にある。井戸を穿つ以前から流水を塞ぎ止め井堰を造り、或いは流水を汲み取って使用する手段方法で潤沢にある水を利用してきた。諸所に転住して当地内に納まっているが村立住居の踏を見れば自然の恩恵を巧みに利用して来ることがわかる。井戸を穿つのは石垣地方より三、四〇年も遅れただろう。

干立村の土地は、風波での流砂が堆積した砂土であるので二、三米も掘れば地下水が出る。この水は塩辛く、煮炊きには差し支えないが飲用には不向きで飲み難い。簡易水道ができるまでは、やはり塞ぎ井戸の世話にならねばならなかった。村に入る東西の道路を境界に南北に区分、南方の村人はアダヌカー、北方の村人はウイヌカーと呼ぶ塞ぎ井戸を使用していた。

与那田橋の変遷

一六八一（天和元）年に、はじめて与那田川に木橋がかかった。瀬田盛崎（方言ではシドゥン）から干立村の筆の先のように砂地が伸びた、現在のマヤパタラへ木橋を架け往還の困難と不自由を解消した。橋をかけたのは石垣親雲上（ペーチン）信明と伝えられる。しかし外洋に面していたので大風による倒壊と海虫の侵蝕が多く、修復が度々で村人の労苦が多く時間の浪費が甚だしかったという。三七年後の一七一八（康熙五七）年に御蔵夫一八六〇人公役夫一三〇〇人、合計三一六〇人を使役して長さ四一間、幅二間の石橋を建設した。干立村を南北に貫く道を川岸まで延長して対岸のカビヤヘ疋（いしばし）を架けた。責任者は慶田城与人昌存と伝えられ、カビヤへの昇り口に石碑が残っている。紙を漉いた所なのでカビヤ（紙屋）と言われたようだ。紙を製した年代も記録もないようである。最近まで製紙原料のカビキ（和名アオガンピ）がマヤパタラに自生していたが、今は見かけなくなった。

干立村と祖納村の往還は石橋を渡り、対岸の山裾の小道を巡って松山さんの田の畦道伝いに行き、現在は記念運動場になっている元養蚕飼育所の桑畑を通るのが学校への通学路であった。この道は、昭和八年木橋が元の外洋に面した箇所に通じるまで使用されたのである。その石橋の跡の岩は、昭和五十二年の北岸道の開鑿の際、取り崩されてミナピシ道に礎石として埋められ、一片の石も残っていない。カビヤの登り口に架橋の石碑があつて、その存在を物語っているのみである。

干立御嶽のはじまり

一八二七（道光七）年、西表親雲上ウーニファア有若氏泰規がマールン船を刻んだ絵馬を干立御嶽に奉納してある。口伝によればウーニファア泰規の多柄御嶽へのお通し祈願の控え所跡地に、宇保家の兄弟が雨露を凌ぐ掘立小屋を建て自家の拝所として祈願祭祀を始めたというが、創建年代は不明である。これが干立御嶽の始まりで、山麓にある多柄御嶽への遙拝所、つまり取次祈願の控所の性格をおびていたが、やがて独立して干立御嶽となったものである。

村の祭神事はすべて世の多柄村建ての租神を祭つてある多柄御嶽で執り行われていた。ジンバイカー（配膳井戸）、チャネーカー（お茶水井戸）が元の御嶽前にあり、祭神事の際の煮炊きおよび湯茶はこの両井戸の水を使用した。イビへ向かつて右手がチャネーカー、左手にあるのがジンバイカーである。古くはパイドウンヤ（拝殿）も右手のチャネーカー近くの広場にあったとの古老の話である。大東亜戦争後の食料難の時に畑として開墾され、昔の形態が崩され、今はイガダイ（苦竹、和名ホウライチク）が植栽されている。故大浜正演さんによれば、拝殿は「自分達が物心ついた頃に既になかった。」との話である。

干立では村の祭事毎に、多柄御嶽へのニガイフチ（口願い）をおこなう。神様に下の干

立御嶽にお移りくださり、祝詞を受けてくださるよう言上して、チカー（神司）、チヂビは下の御嶽に列席する。

神司とチヂビ

元御嶽の神司とチヂビは土族出身であったが、下の御嶽の神司とチヂビは平民出身であった。しかし、下の御嶽での席次は下の御嶽の神司の方が上座になる。そこで、平民の下座につくことは土族の体面上納得できないとして、元御嶽の神司とチヂビは平民であるカイレ（川平家）の人に頼み込み交代してもらっていたという。ちなみに、西表寛次さんの説明によると、祭の中心となるトゥリムトゥは、上原村創建に本家が参加した後は、もと土族のトゥヌシケ（西表家）であった。西表家が石垣島の宮良村へ転居した後は、カイレがトゥリムトゥとしての礼儀を受けている。

土族・平民との階級意識が残っていた大正末年から昭和の三、四年ごろまでは、この状態が続いた。四民平等になり封建的な意識が崩れた後は、元御嶽の神司とチヂビはトゥヌシケ（西表家）に戻り、西表ブナリさんと弟の寛次さんが神司とチヂビになった。この姉弟が亡くなり、養子の秀規さんが妻の出身の宮良村へ移り住んだ後は、屋号アルネの新城寛次さんが引き継いでいる。神司は長いあいだ空席のままだったが、現在は石垣長有さんに嫁いだ姉の好子さんが継いでいる。

豪傑ウーニファの足あと

アーレという屋号をもつ饒平名家にウーニファと呼ばれる豪傑がいた。ウーニファは、鬼のように力が強い子という意味と言われているもののようである。ウーニには、船頭という意味もあるようで、事実ウーニファは貢納船の船頭で、船の出入り時には多柄御嶽へ参詣して、航海の安全を祈願していた。ところが津波後浦田川の河口がウナリ崎湾に変わったため、干立湾内に砂の堆積が著しく干満の潮位も甚だしくて出航に支障を来たことが多くなった。そこで、現代の干立御嶽の浜崎に多柄御嶽へのお通し控え所を設け遙拝祈願して出航し、貢納の役職を恙なく果たしていたとの事である。貢納船を繫留するために鉄の塊を埋めたと伝えられる箇所が干立御嶽前の岸辺近くにあり、直径三、四尺ほどが赤褐色に変色してその跡をとどめていたが、一九九二年の防潮護岸工事で埋められてしまった。こうして干立村の歴史のあかしの一つが消滅した事になる。

また、当時貢納船に使ったと伝えられる水棹が、ウバンシャという屋号の大舩家の家に使われていた。この家は二間半に三間の茅葺きの家で、キャンギ（イヌマキ）の桁として仕様されていた。仲筋家の人々の本土移住によって、家屋が取り壊され、その後は行方不明になっている。

多柄、干立両村人の対立

有若氏を同祖としながら多柄、干立と二つの村に分裂し、互いに誹謗しあい対立し事毎に角突き合わせるといふ不仲であった。上原村建てを幸い、多柄村の人を主体に有若氏一統の大多数がこれに応じて上原村の住人となった。対立不仲の原因は判然としないが、土族と平民の対立ではなかったかと亡父が語っていたとのことである。（故新城節さんの話）残った数少ない多柄人は多勢の干立人に太刀打ち出来ず、干立御嶽が建って拝跪される

ようになると、ほとんどの平民はこれに参加して祭祀し、干立御嶽は平民の御嶽としての性格を帯び始める。祭祀事は平民が主体となっておりおこなうので、自然にこの干立御嶽で執り行われる事になる。それ以後、元の御嶽を「上の御嶽」、干立御嶽を「下の御嶽」とならび称されるようになっていく。

それにしても、アトウクに招請建立し、スバアに遷座し、さらに金座山の西麓に鎮座せしめた多柄村創立以来の守護神として崇め拝跪してきた御嶽が、今日では袖にされた形であるのは如何なものか。拝殿の件もまたしかりである。

古い歴史をもつ三つの御嶽

元御嶽は一七一三（康熙五二）年にまとめられた『琉球国由来記』にイビ名「渡り神通り神」と記されている。干立村には別に「雨御嶽」と「穀御嶽」が記録されている。

アマウガン（雨御嶽）は名のとおり水元の神を祭祀しており、万物の生育に欠くことのできぬ天候を祈願する重要な役割をうけもっている。雨御嶽は、ナンガデ（長堂家）の系譜が代々受け継いでいるが、故長堂孫全さんとキシテ（宮良家）のユウ子さんが祭祀してきた。孫全さんが没して以来、現在チジビは欠員となっている。場所は、イミシクの高台地の南側下のピサザシの山際にあり、タキ岳の中腹のイミシク寄りに雨乞いの碑がある。

穀御嶽には、八重山郡下唯一の粟の神が祭祀されている。これは、干立村のミザッサ（美佐志家）の祖先が粟の種子を中国大陸から持ち帰り、各村々に広く植栽せしめたことから祀り始めたと言われる。粟種をもたらした祖先の名は不祥で、創建年代も明らかではない（故美佐志加那さんの話）。粟種をもち来った来歴を記した記録文書等は、一尺に一尺二、三寸角の木箱に納められてあったが、昭和八年に干立村西方より東方へ乗り越した台風の際、床上四、五尺も浸水したため、祖納村へ全員避難した。そのときの高波で箱ごと流失してしまった。現在、穀御嶽は、新城トヨさんと兄の寛助さんが祭祀している。場所は、県道から干立村に入る手前右手のスーカー（潮井戸の意味）にある。

多柄村から上原村建ての経緯のまとめ

一、一七三四（雍正一二）年、過半数が移転して宇那利崎に村建て（「参遣状」難易の村屋調）スギバン、ナバン川地区へ。

二、一七三八（乾隆三）年七〇人程が別れて、宇那利崎の北部に村建て。現在のニシミジ、富崎野あたりと思われる（『参遣状』および、里井洋一「上原村は何処に在ったか」参照）。

このあと、村人は船浦マーレー川左岸地区に移動し、ピナイサーラの滝の名をとり、鬚村（ピナイムラ）を建てるが、多湿と悪疫のため、同地区船浦のアシザ石のある平野部に再移動する。（故小底宜佐さんの話として故小底ブナリさんに聞いた話）

三、一七五〇（乾隆一五）年、多柄村一五四人、浦内村一二七人、祖納・干立両村二九四人で村敷替えを願い出るが、吟味するとして保留扱いになる（『参遣状』）。

四、一七六七（乾隆三二）年、干立村十戸余りが上原津口の上に、現在の上原村の富崎岳ふもとより小村を立てる（『慶来慶田城由来記』）。

五、一七六八（乾隆三三）年、与世山親方が八重山検視の際に上原村建ての願いが聴許される（『参遣状』）。

多柄村の消滅

上原村はこうした経緯で、多柄村の人が主体で村建てされる。スギバン、ナバン川平地に村建てした人々、ニシミジに村建てし船浦マーレー川左岸に移動、更に同地内のアシザ石の平地に移動した人々も上原村建てに合流して完結する。同年慶田城村は西表村に、西表村は上原村と改称される。歴史は非情で苛酷である。多柄村は住民主体が上原村建てに移動したため、上原村建ての完結と共に由緒があり歴史のある多柄村はこうして歴史から抹消される。誠にもって皮肉で遺憾と言うほかはなく涙も出ぬ。本来多柄村主体で村建てしたのであるから、地名の上原でなく歴史があり由緒がある多柄村と呼称すべきであった。そうすれば多柄村は歴史から消されずに済んだだろう。

多柄御嶽の拝殿の再建いまだならず

一八四七（弘化四）年、マールン船の絵馬奉納より一〇年遅れて、「光永」の扁額が有若氏の子孫であるウーニファが干立御嶽に奉納してある。多柄村建ての祖神を祭祀する上では多柄御嶽に奉納されるのが筋と考えられる。貢納船の出入りに安全を祈願したのだから。しかし、当時は既に拝殿も朽ち倒れ再建のめどもないのでやむなく拝殿のある干立御嶽に奉納したのであらう。大東亜戦争後、昭和二十三、二十四年頃、多柄御嶽の拝殿建設の議が故西表寛次さんによってなされた。しかし、村人は多柄、干立村の来歴を知りながら、戦後の食料難に名を借りた大多数の干立村の人たちの反対にあい、その他の人たちも御嶽に関して口出しすれば御難の虞れがあるとして誰ひとりあえて賛成するものがなく、否決され、その後二度とこの拝殿建設の議がなく今日にいたっている。

昔からの対立を乗り越えて

多柄人と干立人は犬猿の間柄であり事ごとに角突き合わせ不仲であった。考えてみれば、今日では干立人の多くが、多柄村を発祥とする有若氏の名字の「泰」もしくは「寛」の字を名乗っている。もともと同祖同根なのであり、有若氏の流れであるから、住昔からの不仲や対立を忘れて和解すべきではないだろうか。

昔の気持ちだが、今日まで引き継がれ、形を変えて排他的になり敵視や侮蔑になっているとすれば甚だ残念なことである。井の中の蛙と言われても仕方あるまい。これが干立村の発展と向上に足枷となっていたらまことに惜しいことと言わざるをえない。

上原村と浦内村の廃村

一八七九（明治一二）年廃藩置県があり、琉球は沖縄と名を改め日本に付属、大和在番もなくなるがマラリアに痛め付けられながらも上原村は存在し細々と名脈を保っていた。ところが明治四二年に一〇戸程が鳩間村へ移り、他は浦内村に移住、実質的に上原村は廃村となる。この時、有若氏の本家は多の人々と共に浦内村に移住した。浦内炭坑（明治二八年に大倉組が西表島での石炭の採掘を始めフナリヤを本據とし一部浦内に採炭を始めた。一時期は繁栄していた浦内村も炭坑の廃止に伴い一戸減り二戸減りし、子弟の学校就学がこれに拍車をかけ廃村の憂き目にあった。昭和八、九年の事である。現在の干立村はやは

り干立人が主で、上原村廃村後の多柄人、浦内人の移住で構成されている。ナメラ台地に村建てした住昔の多柄村に還ったと言えるのではないか。

上原村、浦内村から干立村に来た人々

ウバンシヤ（大枿家、絶家）

カマメ（糸数家、在石垣）

ギメ（宜間蒲太家）

宜間常吉（在石垣）

クシケ（小底家、在石垣）

友利石戸（在石垣）

トゥナレー（前崎家、在石垣）

ナカイ（平得家）

ニシメ（西銘次郎家）

サクデ（崎枝真勢、在上原）

イッパンヌサクデ（崎枝多良）

崎枝政子（崎枝多良の分家）

崎枝加銘（在那覇）

崎枝亀次郎

マイタレ（前田原家、その後舟浮に移住し現在は沖縄在）

ユヌンヤ（与那国家、兵役除隊満期後居住）。

ユレー（崎枝亀家）

干立村の人々

アーレ（饒平名家）

アルシケ（泰規の養子。新城家、在沖縄）

アルネ（新城家）

アルンテ（石垣正一家、在石垣）

アンネ（石垣家、在上原）

イラベ（真謝家）

ウラツチャ（浦内家）

カイレ（新城寛忠さんの家）

カネー（黒島家、在沖縄）

キシテ（宮良家）

キダネ（慶田盛家、分家の寛助さんは在沖縄）

クイズ（もともとスリズつまり集会所のあった所だが、西表ブナリさんが住んでいた）

シッサベ（白保家、在石垣）

スゲ（塩川家、祖納より入夫家）

スシメ（稲福家、在石垣）

タケー（前鹿川家）

前鹿川徹（分家）。

タムレ（田盛家、在石垣）
タンピセ。

トウヌシケ（西表家、養子の秀規さんは宮良在）

ナツチェ（仲筋家、在大阪）。

ナンガデ（長堂家、在石垣）

バナシケ（絶家）

パマデ（浜端家、絶家）

ピサツサ（石垣家、在沖繩）

ピサデ（平田家、絶家）

ピサヤ（前大家、在那覇）

ピサンカイ（平川家、絶家）

ピネー（髭川家、在石垣）

フタベ（宇保家）

ブレ（大浜家、在平得）

マラケ（黒島家、在石垣）

ミザツサ（美佐志家）

ミナケ（池城家、在石垣）

ユナデ（孫吉、絶家）

他市町村に転出した者あるいは上原村に戻った者もいる。

八月十五夜の獅子祭

往昔は巳亥の日を「トウシヌユー（年の晩）」といい、一年の締めくくりの日で、翌庚子の日が年始の日であったようだ。

古老によれば獅子は村の守護神として遠い昔から崇め奉られ祭祀されて来た。獅子祭は旧暦八月十五夜スリス（集会所）に集まり、月の出を待ち獅子、ミリク、オホホを飾り、年間凡ゆる災厄や病魔等を排除し村人の無病息災を守り、子孫繁栄と植栽物の豊年と海の豊漁をもたらして下さったお礼として、お神酒、塩採、花米等を供え感謝の念を捧げて祭祀し、村の守護神としていつに変わらぬ御加護を祈念する祭りである。

祭祀後獅子は此の日を期して昇天し天上にまします諸々の神々へ、一年間の吉悪、災厄の有無多寡および経過を報告なされ、節祭の庚子の日に下界の此の村に降り守護神として鎮座なさる。かつて大昔から十五夜のマイザトウの前の首尾の祭祀をせぬうちは節祭をする事ができなかった。つまり獅子祭り前に巳亥の日が巡って来ても節祭をすることが出来ぬ習わしであった。戦前戦後の一時期迄は老若男女多数揃い守護神を祭り感謝を捧げ祭祀していたが、人口の流出に伴い過疎化が進むにつれ村の役職者ならびに存命のお年寄りのみとなり、近年は村の役職幹部だけの祭祀となつて寂しい限りである。然も獅子の首尾祭りの謂れが忘れられ、ゆかしい風習が廃れつつある。

伝承を無視すると

「昔からある村の風習はなくなるな。また、ない習俗はつくるな」との伝承がある。若い人達は此の言葉をよくよく噛みしめ吟味して後世に伝えてほしい。

一九九〇年平成二年の節祭には此の傳承を無視し節祭を執り行つて来て旗頭を倒し破損せしめると言うハプニングがあった。厳に注意すべきである。古老に聞いたが「十五夜の獅子祭前に節祭を行った覚えはない。」と故大浜正演さんと故黒島英輝さんは話していた。祖納村ではその習俗を守ったためか無事故であった。

なぜ干立の獅子は雄だけか

昔は獅子には「マイザトウ」のマイと唱え祝詞にもそのように唱える。獅子は雌雄二頭あるのが本来の姿と思うが干立村のみ雄だけで雌が欠けている。大昔から雄のみであったか否か、口伝も文献もない。前記の二氏に聞いた処、「自分達の知っている時から雄のみであった。」と、一七六八年明和五年に上原村建ての際多柄、干立村建ての有若氏本家が多柄村の人々を引き連れ移住した際雌獅子を守護神として持参したに違いない。何しろ両氏共母の胎内にも居なかった頃の事で知らない事であろう。上原村残存の方々も既に幽冥をことにし聞き出す事も出来ない。山々に圍まれ雨が他町村に比較して多く、湿度が高くマリアの風土病もあり、南蛮船等の漂着も多い土地柄で医師のいない当時の人々は勢い神仏に頼るしかなく、木や石も神仏として拝跪した時代で守護神として獅子に依據し上原村建てに特別持参しただろう。以後干立村には雄だけの獅子となったと思われる。

獅子頭製作の年代不明、口伝もない。今有るのは二代目で前鹿川石太さん宰領で美佐志加那と大正末の頃製作。オホホ、ミリクの面も同代に再調製したと伝えられる。

猪にまたがった白髪の神にであう

干立より浦田田原へ山越えするやつと人が通れる程の山道、戦後ザラバ浦内川支流まで農道ができたが今は田圃も荒れ地になりせっかくの道も放置されて崩壊し、昔の小道になっている。そのナータ山道を浦田へ農作業に行く男が登り口を登りきり平坦な道になり、もと営林署苗圃のあった付近に行つたところ、白髪の顎髭を膝まで垂れ下げた赤ら顔で白装束の異相の男が、身長四、五尺程のボスと思われる大猪に跨がり三、四〇頭も引き連れ浦田の方面から来るのに出逢つた。仰天した男は傍らの林の中に退き経文を唱えひれ伏して異相異様な人の通り過ぎるのを待った。余りの恐ろしさ、怖さに胴振るいし口もガクガクし身震いも止まらず地面と一つになって異相の男、猪の群れの通過を待った。猪に打ち跨がつたくだんの髭の異様な人はこの男を「ギョロリ」一睨みして素通りしていった。それをやり過ごした男は気も動転逃げようとし立ち上がったが腰が抜け体も硬直し、進むことも退くことも出来ず小一時間程もそのままにしている外なかった。漸々気を静め這いながら家まで辿りつき寝込んでしまい半年程も動けず頭の髪も皆抜け落ち回復するのに相当の日数が必要だったと云う。氏名、屋号等残念ながら聞き洩らしたとの話（美佐志加那さんの昔話）。

人間が脱皮して若返らないわけ

昔々ガヤドゥナリヤ（和名ヒバリ）が神様のお使いとして人間界につかわされた。神様の依頼は、脱皮する薬を持って人間に薬浴させることだった。ところが、ヒバリは途中フピ（和名グミ）の実が鈴なりになっていて赤く熟れているのを見、ちようどお腹もすいていたので薬入りの瓶を道端に置きフピの実を食べている間に蛇や蟹が来合わせ、薬入り瓶

をひっくり返して浴びてしまった。それで、蛇や蟹は脱皮するようになった。ヒバリは僅かに残っていた葉を仕方なく人間の手足の爪にのみかけたので、人間は手足の爪のみが生え替るようになったと言う（美佐志加那さんの昔話）。

ザンヌスーカシ（ジュゴンの潮垣）

干立の夫婦石トウベラアからピサザシ（平崎）にかけて、石を並べ積み上げて潮垣をつくり、干潮時その中に逃げ残った魚を銚で突き取ると言う原始さながらのしかけがあった。昔は、各村々に専用の潮垣があり、今でも各所に散見される。前鹿川家の石太爺さんの若かりし頃のこと、ちょうど当番の見回りで潮垣の中にザン（ジュゴン）が取り残され干されて見つけた。村人総出で捕獲しようとしたが、大暴れしてとうとう潮垣を踊り越えて身体の中に銚を持ったまま逃げ出した。それを松の刳船で追いかけて、外離島、ヌバン崎、鹿川湾、南風見岬を経て、新城の下地島で漸々仕止め持ち帰ったと言う。往昔は干立湾にもザンが住みついていたとの事である。王朝時代は新城島の近辺ではザンが相当いたらしく貢納品にザンの肉を含めていたとの話である。ジュゴンのことを西表島の方言ではザンといっている（美佐志加那さんの昔話）。

人追い墓の話

スシピヤーという場所に赤竹が自生しており昭和の五、六年頃迄見受けられたが、今は松や他の雑木におされて諸所に草竹として僅かに残っているだけである。三、四月にかけ竹の子を折り取るため四、五名の子供達が行きそれを取りながら、この付近の昔の墓が、人を追う等と親から聞いた話をしつついるうち、その墓の付近であつたらしく、墓の中から石垣の崩れ落ちる音や、骨壺を割る音、多勢の人の言い争う声、大雨が降りしきる音がして来たのでびっくり仰天して逃げ帰ったと言う。家に帰りその話をした処、昔の墓で人が来るとそのような事があり人を追い払うので昔から「人追い墓」として誰一人近寄らないとのことであつた（美佐志加那さんの昔話）。

